研　究　紀　要

第 6 号

1 9 8 9

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

羽状縄文系土器の文様構成（点描）—1　黒坂禎二……1

集落資料集成の一方法
——　縄文時代中期集落を中心として　——　石塚和則……29

前方後方墳出土土器の研究　高橋一夫……35

関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差
中村倉司……95

北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅲ　昼間孝志・宮　昌之
木戸春夫・高崎光司……125
赤熊浩一

関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差

中　村　倉　司

はじめに

埼玉県において最初に竈が出現したのは、県北部の児玉地方であるというのが定説となっている。1957年、本庄市二本松遺跡第四号住居跡の調査が行なわれ、それが『野田市三ツ堀遺跡』(横川1963)で横川好富によって検討された1963年以来のことである。埼玉最古の竈は、そのまま関東最古でもあるという認識は、現在までのところ支持されているか否かはともかくとして、その反論は提示されていない。この地に竈という外来の文化要素が、何故最も早く出現したのか興味深い事象である。この原因を究明するには、同じ外来要素である朝鮮半島系土器・須恵器・大形甑や横穴式石室、更に在地の問題など総合的な視野から検討しなければならない。しかし、本稿ではその用意がないので、ここでは竈・大形甑と須恵器に対象を絞って検討してみたい。これらの要素は切り離す事のできない事象であるが、伝播の過程において若干のズレをもって出現している。一般的に、大形甑・須恵器は竈に先行して出現する。

ところで、大形甑・竈・須恵器、あるいは須恵器杯を模倣した土師器杯(模倣杯)の出現は、従来鬼高式期開始の指標として捉えられてきた。その後新資料の増加に伴い、この現象は和泉期の新しい段階からであると言う見解に修正され、和泉式土器の型式内容を検討する段階にきている。近年の成果によれば、竈は北九州(福岡県)では弥生時代後期、近畿では古墳時代前期には散見されている(西谷1983)。しかし、この竈が直ちに普及する訳ではなく、本稿で意図する竈とは直接に関係するものではないと考えておきたい。竈が住居の基本的な施設として普遍的な存在となるのは、汎日本的にみて古墳時代後期になってからである。古墳時代後期、すなわち鬼高期に竈・大形甑・須恵器・模倣杯が出現するという考えは、最近では鬼高式土器の捉え方の相違によって必ずしも共通の認識とはなっていないばかりか、現在では否定的な見解が大勢を占めている。

竈・大形甑・須恵器の各地における出現時期を把握するには、微視的な土器編年を確立しなければならない。しかし、それは容易なことではない。各地域の土器編年は在地資料の詳細な分析を基調として、それに須恵器の共伴関係に基づいて相関関係を求めている。そして、実年代も須恵器から導いている。すなわち、須恵器の伝世を考慮する必要がないという前提に立っている訳である。伝世品の問題は今後の検討課題であるが、須恵器に限らず土師器についても後世に『残存』するものは認められる。大まかな編年には、須恵器の共伴は有効であるが、その限界も意識しておく必要がある。各地域において最も豊富な資料は、在地の土師器である。しかし、これには地域差があり広範な地域の編年の指標とすることは不可能である。よって、その整合性に不安を覚えつつも須恵器に頼る以外に方法がないのが現状である。とは言え初期の須恵器資料は充分ではなく、未だ共通の認識となる編年は提示されていない。本稿では埼玉県北部の資料を土器編年の基軸に据え、それを

各地域に普遍的に認められる坩の変遷を指標として、関東各地の土器の併行関係を求めている。年代観は信用できると判断された共伴須恵器に時間を求めるという、不安定な基盤に立った試行である事をお断りしておきたい。

1．埼玉県

1．地区の設定

埼玉県は、秩父山地に源を発する荒川によって地形的に大きく分けられる。まず上流の秩父盆地を中心とする地域を『秩父地域』とする。中流では左岸の北部に位置する児玉・大里郡を『児玉地域』とする。下流では右岸・左岸に大きく分けられ、更にそれぞれ南北に分けられる。左岸は北部の行田市周辺を『埼玉地域』、南部の大宮台地を中心とする地域を『大宮地域』とし、右岸は北部の比企と入間郡の一部を『比企地域』、南部の入間と北足立郡の一部を『入間地域』とする。これらの地域では、大形甑の形態に相違が見られる(後述)。

2．土器の分類と編年

該期の土器編年については、『宇佐久保遺跡』の付編(中村1979)で述べたことがある。ここでは、所謂鬼高期全般について編年を試みた。厳密に言うならば竈の出現期以降を対象としたので、実際には和泉期のある時期を含んでいる。その後、利根川章彦によって拙稿と同時期の土器編年が呈示された(利根川1982)。拙稿では図を掲載していなかったために、十分に理解されなかったので、ここに図を示して先の編年の不備を補いたい。しかし、本稿で取り上げる時期は竈出現期についてなので、『宇佐久保編年』の「第Ⅰ段階」から「第Ⅲ段階」に限って検討するに留どめたい。当時、竈・大形甑・須恵器は同時期に出現するという前提があったが、その後の検討の結果、後二者は竈に先行することが解った。そのために本稿では、『宇佐久保編年』の第Ⅰ段階以前にⅠ期を設け、「第Ⅰ段階」をⅡ期、「第Ⅱ段階」をⅢ期、「第Ⅲ段階」をⅣ期としたい。なお、編年は資料の豊富な児玉地域を中心に県北部に限定している。

a．分　類

壺A…口縁部が段をもつもの。　B…素口縁部のもの。

甕A…小形のもの(小形甕)。　B…大形のもの(大形甕)。

甑A…小形のもの(小形甑)。　B…大形のもの(大形甑)。

椀A…小形壺の形態を呈するもの。　B…口縁部が短く外反し、胴部の膨らむもの。

C…平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部が短く外反するもの。

D…偏平な体部を持ち、口縁部が外反するもの。

E…体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部と体部の境が無く、器高の深いもの。また、浅い杯状を呈するものもある。

杯A…体部から口縁部が屈曲、外反して立ち上がるもの(源初杯A)。

B…直線的な体部から口縁部が上方に屈曲して立ち上がるもの(源初杯B)。

C…須恵器の影響を受けていると考えられるもの。

高杯A…椀を載せるもの。　B…杯・脚部に屈曲部をもつもの(和泉型高杯)。

C…杯・脚部のいずれかに段をもつもの(段付高杯)。

b．編　年（第1図）

Ⅰ期：愛宕遺跡第3・7号住居跡(駒宮1976)

壺Aは、口縁部の屈曲部が上位にあり、屈曲の度合も強い。壺Bは、球状の胴部と長い口縁部をもち、口唇部は平坦となる。大形甕(甕B)は口縁部が短く、「く」の字状に屈曲し、胴部は球形を呈する。口唇部は丸い。壺と甕の明瞭な形態差は存在しない。小形甑は、内湾気味に大きく開いて立ち上がる。大形甑は初現であるが、既に長胴化している。椀は小形壺状を呈するもの(椀A)が存在するのみである。坩は口縁部が長く、最大径は口縁部にある。大きさは大・中・小があり、多様である。高杯Aは存在しない。高杯Bは杯部が深く、脚内面にはヘソと積み上げ痕跡を残すものが多い。高杯Cは、杯部に突帯をもつ。

Ⅱ期：諏訪遺跡30・32住居跡(柿沼1979)　・古川端遺跡8・22住居跡(柿沼1978)

壺Aは、口縁部の屈曲位置が下位になり、突帯で表現されるようになる。壺Bは、Ⅰ期と同様である。大形甕は口縁部の屈曲が弱くなり、上方に立ち上がる。極めて僅かに長胴化の兆しが窺える。小形甑は立ち上がり角度を増す。大形甑は胴部の膨らむもので、多孔・中央孔、それに取っ手を持つものもの散見される。また大形甕の底部をそのまま穿孔した形態のものも見られる。椀Aは、器高を減ずる。椀B・C・Dが初現する。椀の底部は、基本的にはまだ丸底のものは見られない。

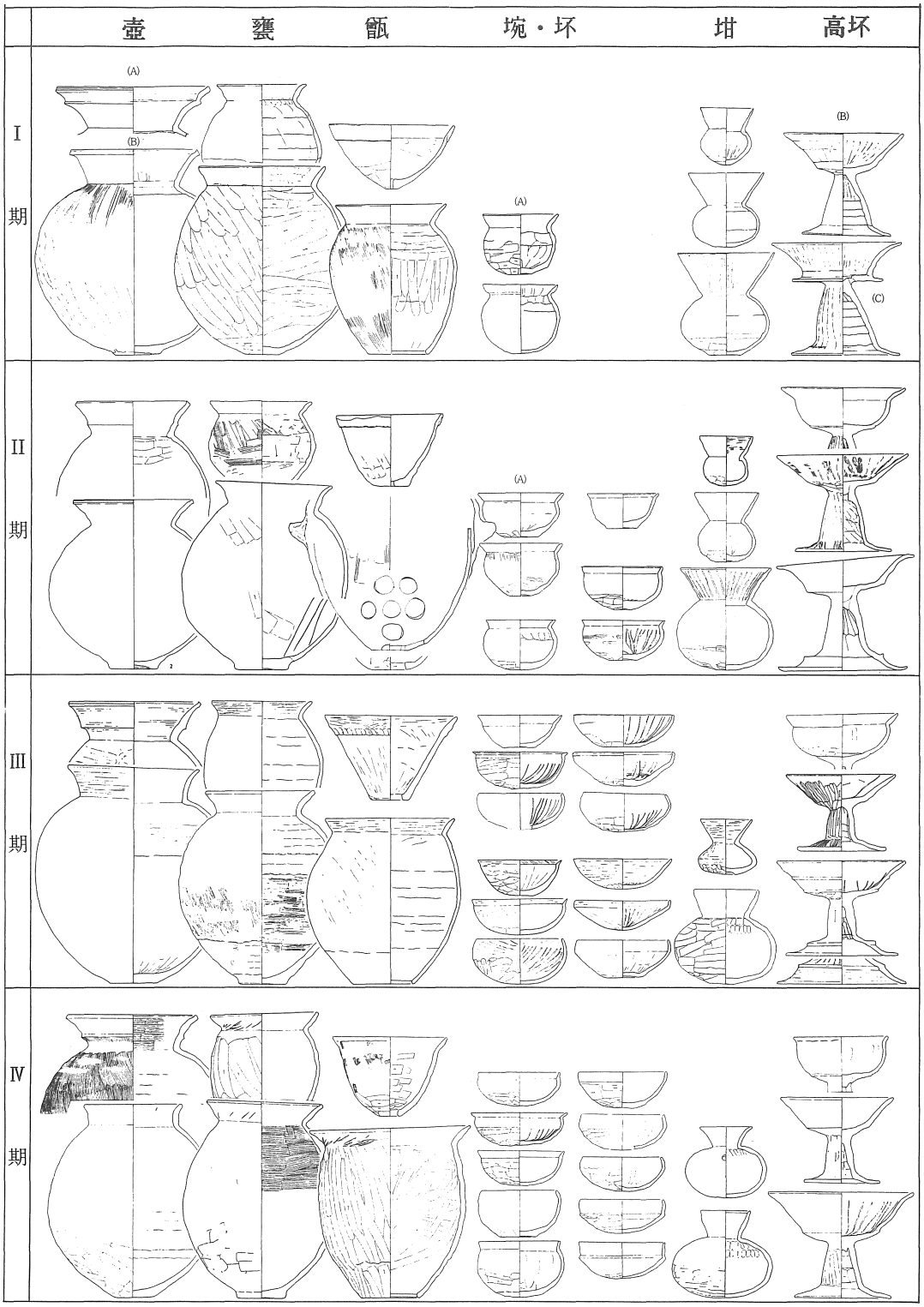
坩は口縁部が短かくなる。口縁部と胴部の径は、ほぼ等しくなる。高杯Aが出現する。高杯Bは、積み上げ痕跡を残すものが多い。また、短脚化の兆しが窺える。高杯Cは杯底部が水平方向に延び、脚部の突帯は明瞭に突出する。また杯口径より脚径の方が大きいものがある。

Ⅲ期：諏訪遺跡49号住居跡(柿沼1979)　・二本松遺跡6号住居跡・西富田遺跡第7号住居跡・東五十子遺跡第8号住居跡(水島1976)

壺Aは、Ⅰ期と同様である。壺Bは、口縁部が上方に立ち上がり、口唇部も丸くなる。大形甕は、長胴化しはじめる。小形甑は、該期以降単孔のものに統一される。椀Cは口縁部が開く。椀Dは、次期以降器高を減じるのに対し、該期に出現する椀Eは、器高が深くなりながら変遷する。杯A・Bが出現する(『宇佐久保遺跡』(中村1979)では、和泉期の椀の器高が低くなって杯形化したもの、ないし、須恵器杯の影響が予想されるにも拘わらず明瞭な模倣杯とならないものを総称して「源初杯」と命名した)。椀・杯は、丸底のものが主流を占める。坩は口縁部が短くなり、胴部は扁平となる。最大径は胴部に移行する。高杯Aは、杯部の器高が高くなる。高杯Bは、脚内面の積み上げ痕跡は残るが筒部が膨らみ、裾部の屈曲は強くなる。高杯Cは、筒部と裾部の段が除々に弱くなる。

Ⅳ期：下田遺跡第24号住居跡(柿沼1979)・諏訪遺跡第45・46・48号住居跡(柿沼1979)

壺Aは、前時期と同様である。壺Bは、口縁部が上方に立ち上がり、口唇部は丸い。大形甕は明瞭に長胴化しはじめる。小形甑は、立ち上がり角度が強くなる。大形甑は、口縁部と胴部の径が等しくなり、定型化してくる。椀Dは浅く、椀Eは深く器高が変化する。明瞭な模倣杯(杯C)が出現する。坩はますます扁平になり、口縁部は短く上方に立ち上がる。高杯Aは、杯部の器高が深くなる。高杯Bは、脚内面の積み上げ痕跡は認められなくなり、脚は短くなる傾向にある。高杯Cは脚部の段が形骸化して沈線で表現されるようになる。



第１図　埼玉県児玉地域の土器編年（５世紀代）

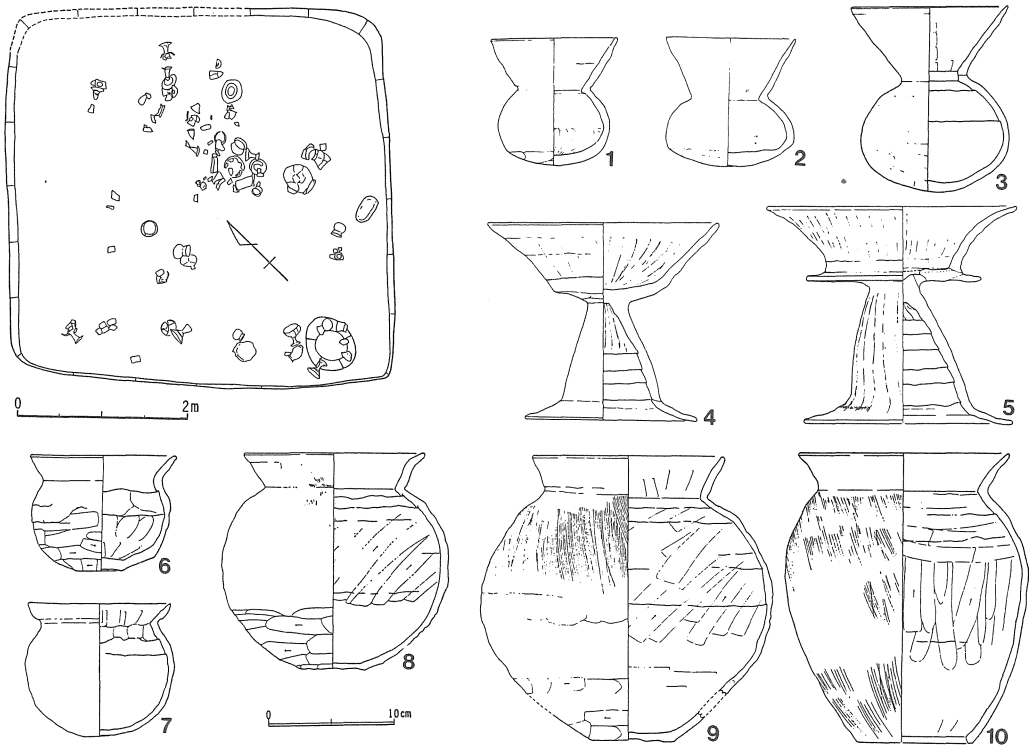
c．年代観

以上、Ⅰ期→Ⅱ期→Ⅲ期→Ⅳ期まで編年してきたが、これはⅠ期以降は拙稿(中村1979)及び利根川編年(利根川1982)と一致する。利根川は5世紀中葉須恵器生産開始説である田辺昭三の年代観(田辺1981)を遵守している。いっぽう最近では、都出比呂志(都出1982)・白石太一郎(白石1985)によって須恵器の生産開始時期を4世紀末から5世紀初頭に遡らせる説が提出されている。この年代観を基にして比田井克仁『南関東五世紀土器考』(比田井1988)、坂口　一『東国須恵器の一様相』(坂口1988) によって該期の編年が詳しく、体系的に述べられている。両者の目的は共に違うが、結果として5世紀を4段階に区分し、「各段階」・「各期」は1／4半世紀で均等されている。実年代については、今後の検証を持たなければならないが、拙稿を含めた4氏の各段階の土器の平行関係は、細部については齟齬をきたしているが、概ね一致しているので、この細分案に沿って以下論を進めていきたい。実年代については、都出・白石説に準拠したい。また、初期須恵器については『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』(千曲川水系古代文化研究所1987)に網羅的に集成されているので、これを参考としたい。

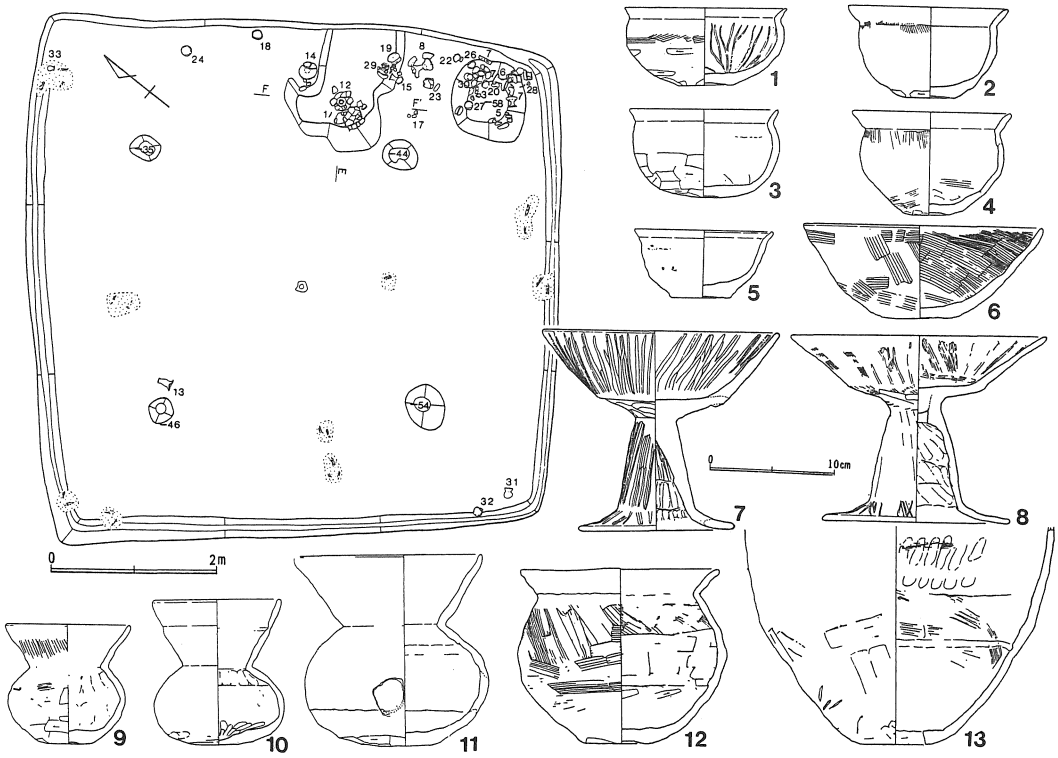
3．各地方の様相

a．児玉地域（第2・3・4図）

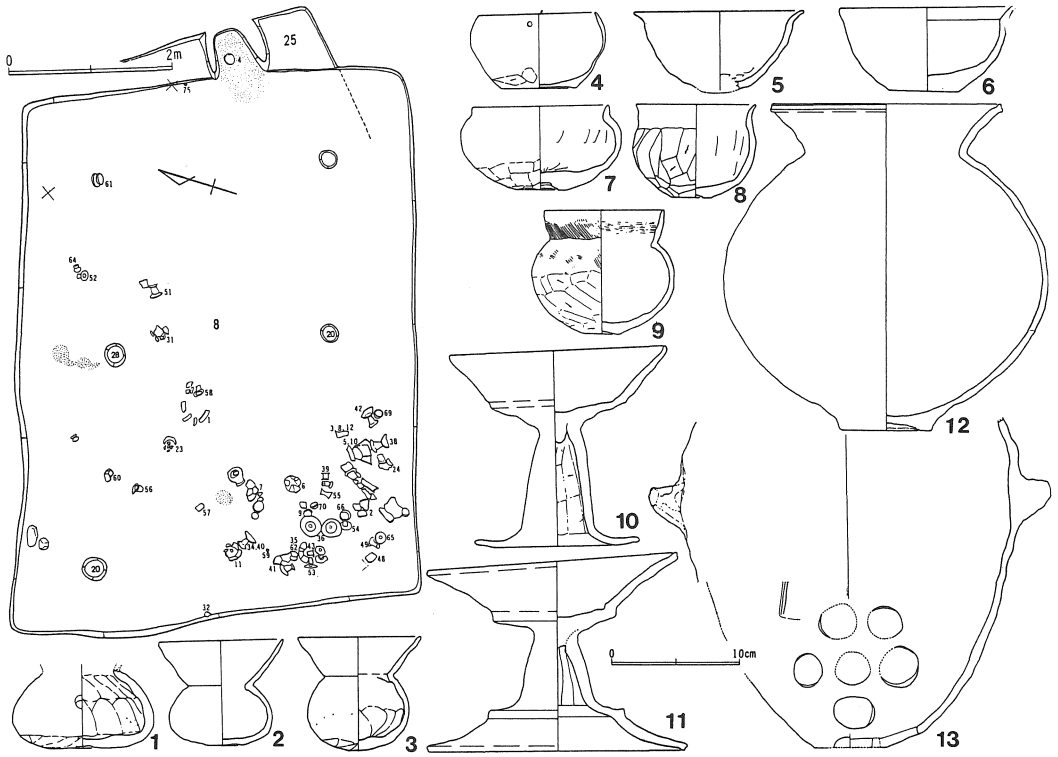
編年については、前項で示したとおりである。竈はⅡ期の諏訪遺跡30・32号住居跡(小久保1979)、古川端遺跡22号住居跡(小久保1978) に認められ、該期以降ほぼ普遍的に普及している。須恵器は



第2図　愛宕遺跡第3号住居跡出土土器



第３図　諏訪遺跡第32号住居跡出土土器



第４図　古川端遺跡第８号住居跡出土土器

TK73が美里町樋之口遺跡(駒宮1987)・同村後B遺跡(駒宮1987)から出土している。大形甑は、Ⅰ期の愛宕遺跡(駒宮1976)で認められる。

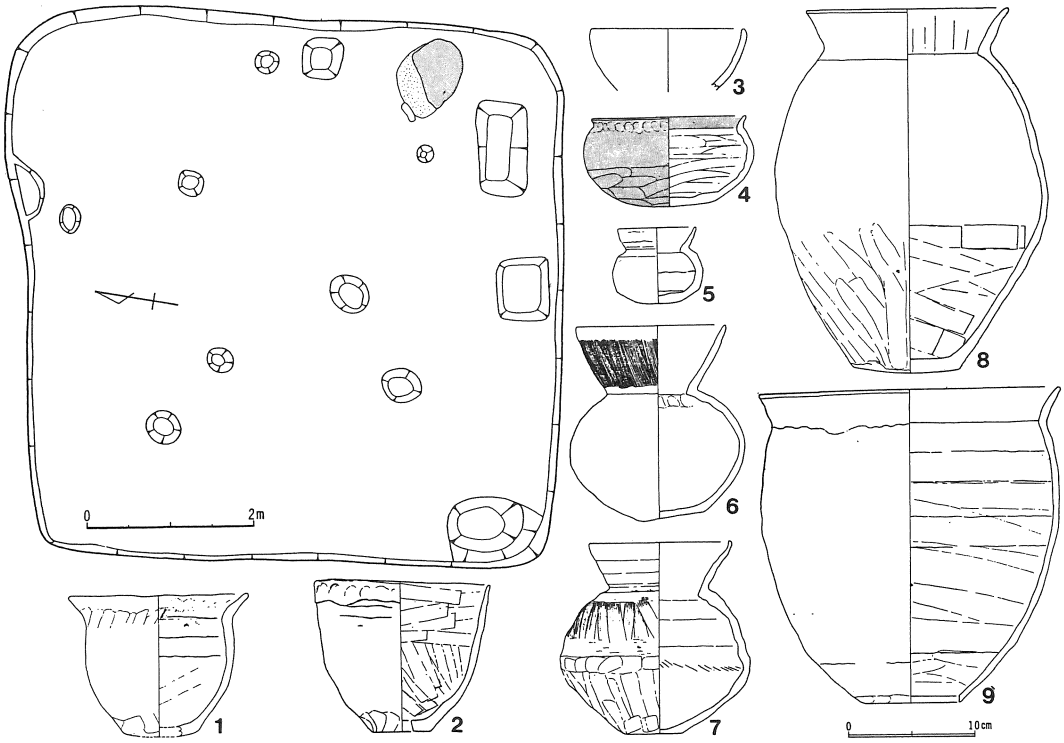
b．比企地域（第5・6・7図）

江南町塩前遺跡第1号住居跡(新井1982)、東松山市駒堀遺跡第4・10号住居跡(今泉1974)、同舞台遺跡第4号住居跡(谷井1974)が挙げられる。塩前遺跡は坩・高杯からⅡ期に比定できる。駒堀遺跡では、該期の住居跡7軒のうち2軒に竈、その他は炉が施設されている。まず駒堀遺跡について説明しておきたい。杯形土器は源初杯が特徴的にみられるが、初期的な模倣杯も散見される。小形丸底坩形土器は口縁部の比較的短い新しいものが見られる。同様に甕形土器も長胴化したものが見られる。

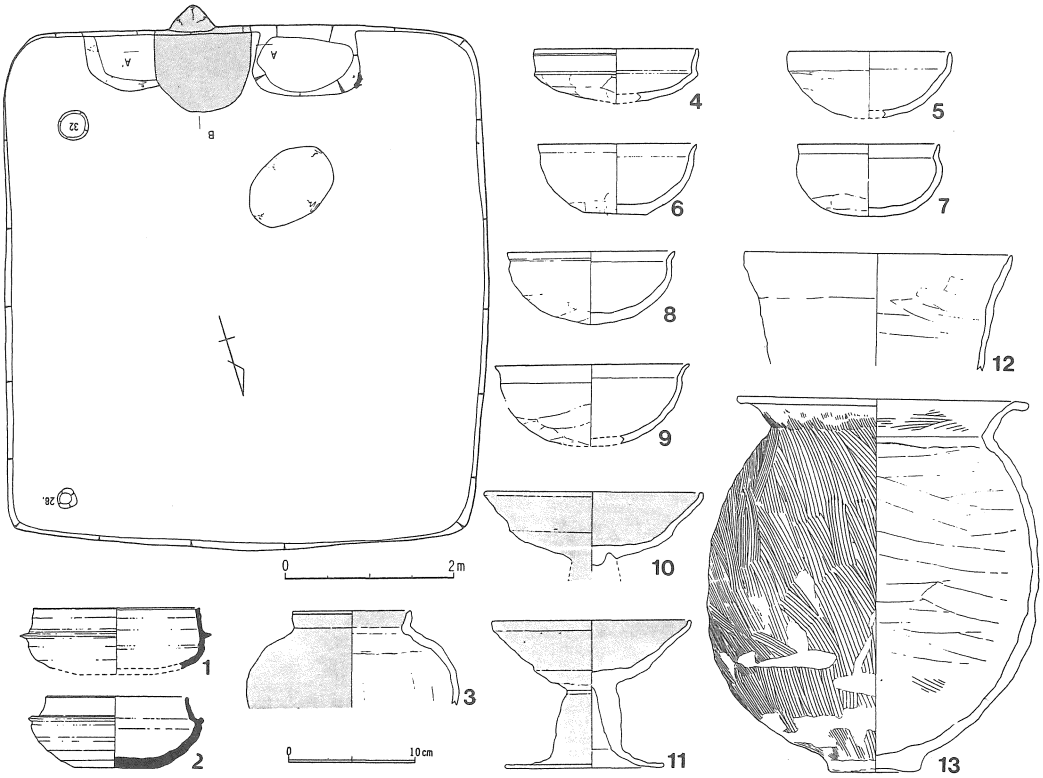
竈はⅡ期の塩前遺跡で出現している。しかし、Ⅲ期の駒堀第4号住居跡では、初期的なもので壁に煙道が届いていない。同期の駒堀第10号住居跡では比較的定型化している。しかし、嵐山町行司免遺跡(植木1988)でも炉から竈移行期(Ⅳ期)の住居跡が数軒検出されているが、該期においても竈は普遍的な存在とはなっていない。また、模倣杯の存在も極めて希薄である。須恵器はTK216～TK208段階のものが舞台遺跡第4号住居跡から出土している。大里村舟木遺跡では、TK216段階のものが出土している。大形甑はⅢ期の駒堀遺跡第4号住居跡で確認されている。

c．入間地域（第8図）

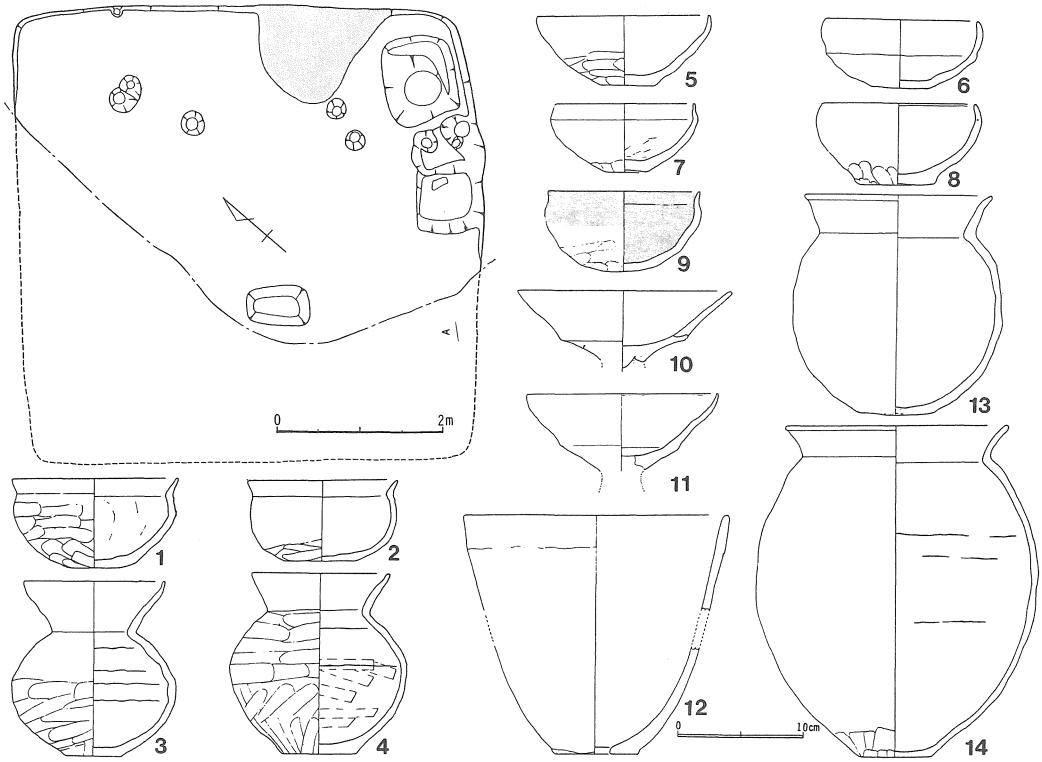
富士見市打越遺跡(会田1978) が挙げられる。打越遺跡では19軒の住居跡が検出されたが、出土



第5図　舞台遺跡第4号住居跡出土土器



第６図　舞台遺跡第４号住居跡出土土器



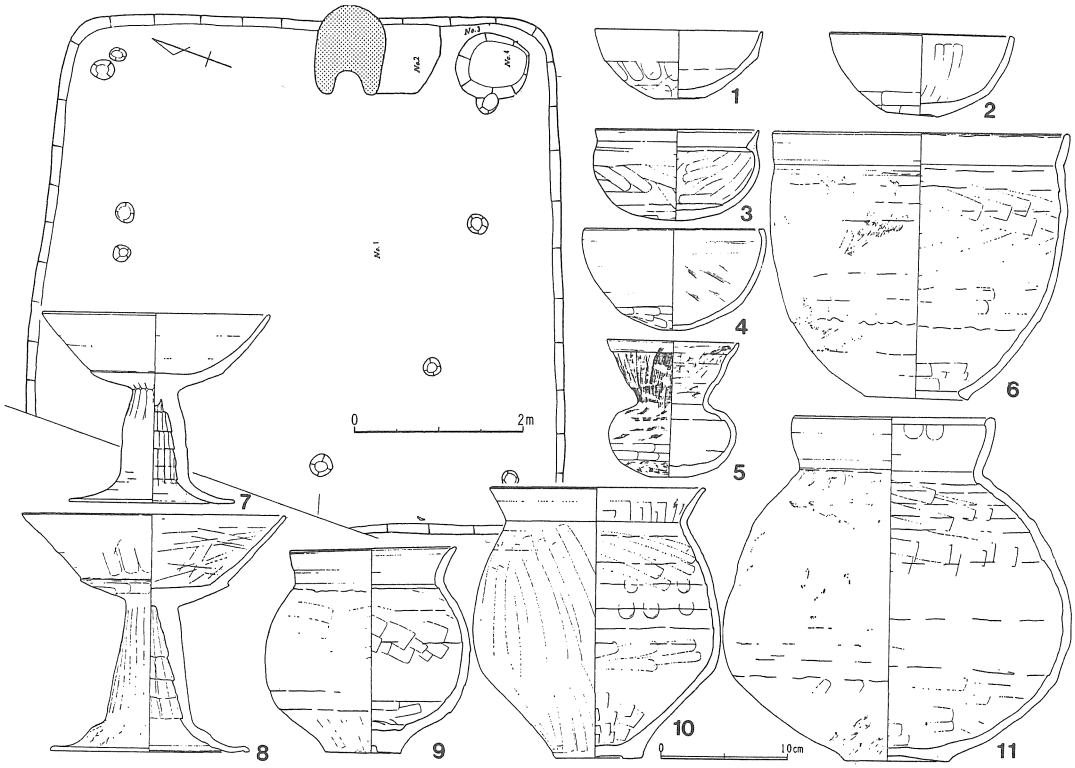
第７図　駒堀遺跡第10号住居跡出土土器

遺物の不明な16号住居跡・17号住居跡が重複するのを除き、その他はほぼ同時期である。なお、基本的には殆どの住居に竈を有する。まず、杯形土器についてみると椀形土器についてみると椀形土器との区別が不明瞭なものがある。これらは殆ど丸底化しており、完全に杯形を呈するものと共伴する。また11号住居跡では源打杯、19号住居跡では模倣杯Ｂも認められる。小形丸底坩形土器は口縁部が短く、胴部は扁平である。なお、須恵器瓻を模倣した小形丸底坩の胴部を穿孔したものもある。高杯形土器は短脚であり、脚部内面は篦削り調整し積み上げ痕を残さない。甕形土器は、胴部に刷毛目を残し古い様相を呈するものもある。しかし、刷毛目を残さず長胴化の兆しも僅かに窺えるものもある。壺形土器は複合口縁を呈する古い要素を残すものは認められない。また甑形土器は大形、長胴化している。これらの時期は、Ⅳ期に比定されるものと思われる。杯形土器、甕形土器の大部分が第Ⅰ・Ⅱ期のものと類似するが、高杯形土器・壺形土器・甑形土器から勘案すれば、該期に比定するのが適当であろう。

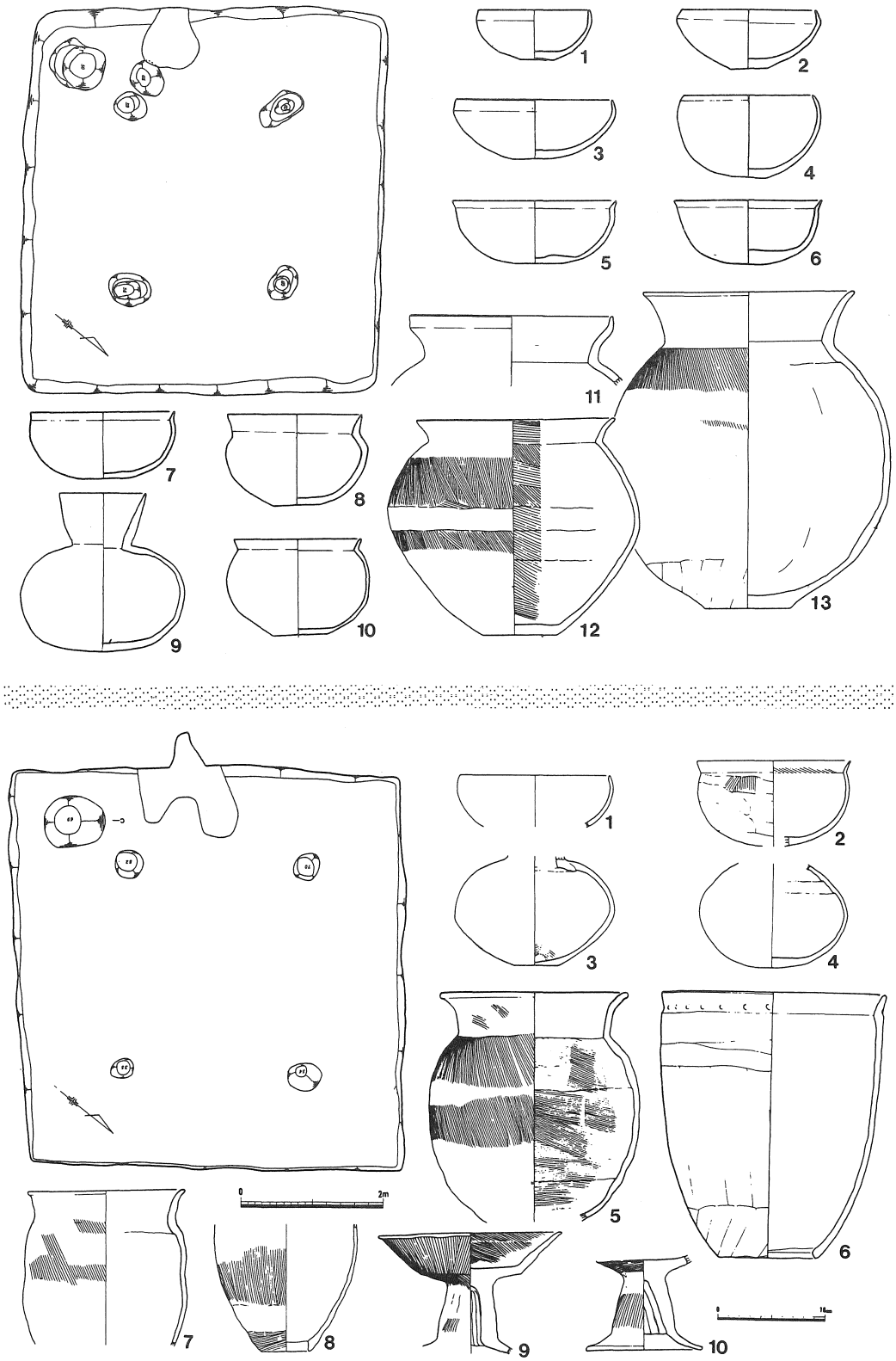
すなわち、竈はⅣ期に出現する。須恵器は、川越市御伊勢原遺跡でTK216段階のものが出土している。大形甑も現時点ではⅣ期になってからである。

ｄ．埼玉地域（第９・10図）

行田市武良内遺跡第１・２号住居跡(金子1977)、高畑遺跡第１号住居跡(金子1977)、弥藤吾新田遺跡第５号住居跡(田部井1976)が挙げられる。武良内遺跡第２号住居跡は竈の施設が不明であるが、同時期と考えられる第１号住居跡では竈をもっているので、前者にも存在していた可能性が高い。



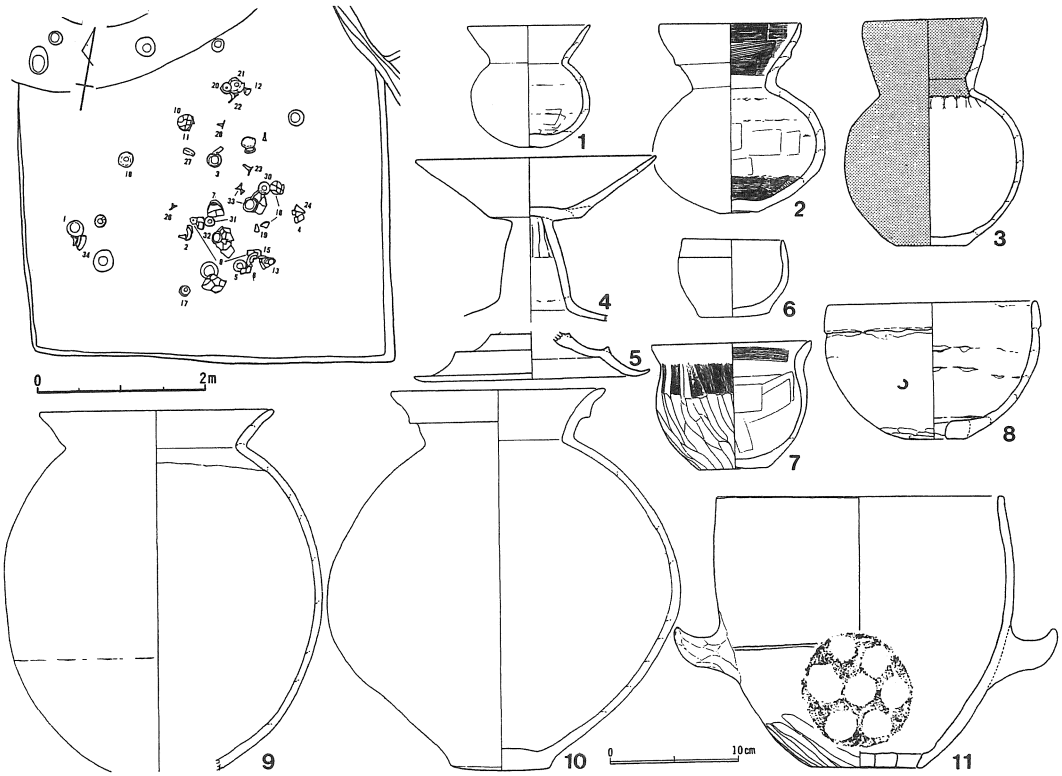
第８図　弥藤吾新田遺跡第５号住居跡出土土器



第９図　打越遺跡第１（上）・７（下）号住居跡出土土器

杯形土器は、弥藤吾新田遺跡で源初杯が一例見られるのみである。椀形土器は弥藤吾新田遺跡、武良内遺跡１・２号住居で僅かに認められるのみである。杯形土器の器形は多様であり、底部は丸底と平底の両者がある。小形丸底坩形土器は、弥藤吾新田遺跡と武良内遺跡では形態が異なる。前者は口縁部が長く、胴部は扁平である。両者の最大径は、ほぼ等しい。これに対し、後者は口縁部が短く、胴部は球形を呈する。また、武良内遺跡一例は口縁部と胴部の最大径がほぼ等しいが、その他は胴部に最大径がある。高杯形土器は脚部が長く、脚部内面に積み上げ痕を残し、頂部にヘソを有し杯部の深い弥藤吾新田遺跡例と脚部が前者よりも開き、かつ短く、脚部内面を調整して積み上げ痕を消し、杯部の浅い武良内遺跡例の二者がある。後者には、段付高杯が共伴する。甕形土器は長胴化の兆しの窺えるものもあるが、殆どは球形を呈する。刷毛目を残すものは認められない。壺形土器は明瞭に複合口縁となるものがあり、口縁部外面の稜は強い。大形甑形土器は長胴化も器形の斉一性が見られない。武良内遺跡の大形甑は、須恵器甑を即自的に模倣したものとして注目される。上述したように武良内遺跡と弥藤吾新田遺跡の土器の様相は相違する。前者は杯形土器の出現以前、坩形土器の球胴化などの様相からⅡ期に比定できそうである。後者は杯形土器が模倣杯Ａの範疇で捉えられ、他の器種に比して相対的に新しい様相を呈する。しかし、長脚で脚部内面に積み上げ痕を残し、ヘソが突出する高杯形土器、及び小形坩形土器の特徴からⅡ・Ⅲ期に比定される。

竈はⅡ(Ⅲ)期の弥藤吾新田遺跡、須恵器はTK23段階のものが熊谷市鎧塚古墳から出土している。大形甑はⅡ期の武良内遺跡で確認されてる。



第10図　武良内遺跡第２号住居跡出土土器

e．大宮地域（第11・12図）

松伏町前田遺跡(横川1965)、桶川市高井遺跡(吉川1969)、同高井北遺跡(吉川1976)、伊奈町大山遺跡Ａ区34号住居跡(今泉1979)が挙げられる。これらの遺跡では、総計11軒の該期の住居跡が検出されているが、竈をもつのは前田遺跡３号住居跡、高井遺跡21号住居跡、高井北遺跡９号住居跡、大山遺跡Ａ区34号住居跡の４軒である。このうち前田遺跡４号住居跡では竈が壁から離れた特異なものである。また大山遺跡Ａ区34号居跡を除く２例の竈は貧弱なものである。

杯形土器は椀形土器と区別するのが困難なものが多く、殆どが源初杯である。しかし中には前田遺跡３号住居跡、高井北遺跡９号住居跡例、大山遺跡Ａ区34号住居跡例のように、口縁部と体部を区別した広義の模倣杯Ａも共伴する。椀形土器は殆どが丸底で器高が比較的浅く、口縁部が短く外反するものである。小形丸底坩形土器は、口縁部が短く内湾しながら立ち上がる。胴部は扁平となり、最大径を有する。高杯形土器は、脚部の短脚化が進み裾部は屈曲して広がる。脚部内面はヘソも含めて調整される。また杯部と脚部の接合にヘソを用いない、新たな接合方法によると思われるもの(高井遺跡１号住居例)も認められる。甕形土器は高井遺跡21号住居跡出土例のように例外的には刷毛目を残すものがある。しかし一般的には不明瞭な篦削りによるもので、長胴化の傾向が顕著に窺える。壺形土器は良好な資料に恵まれないが、複合口縁を呈するものは見られないと思われる。甑形土器は古い要素である中央孔のものが見られるが器形は既に長胴化している。

これら４遺跡は大山遺跡Ａ区34号住居跡が若干新しくなる可能性を有するが、ほぼ同時期として捉えることができる。Ⅲ・Ⅳ期に比定される。すなわち、竈・大形甑の出現はⅢ期以降、須恵器はＴＫ208～ＴＫ23段階のものが、浦和市白鍬遺跡・与野市殿ノ前遺跡・越谷市見田方遺跡などの祭祀的な遺跡から出土している。

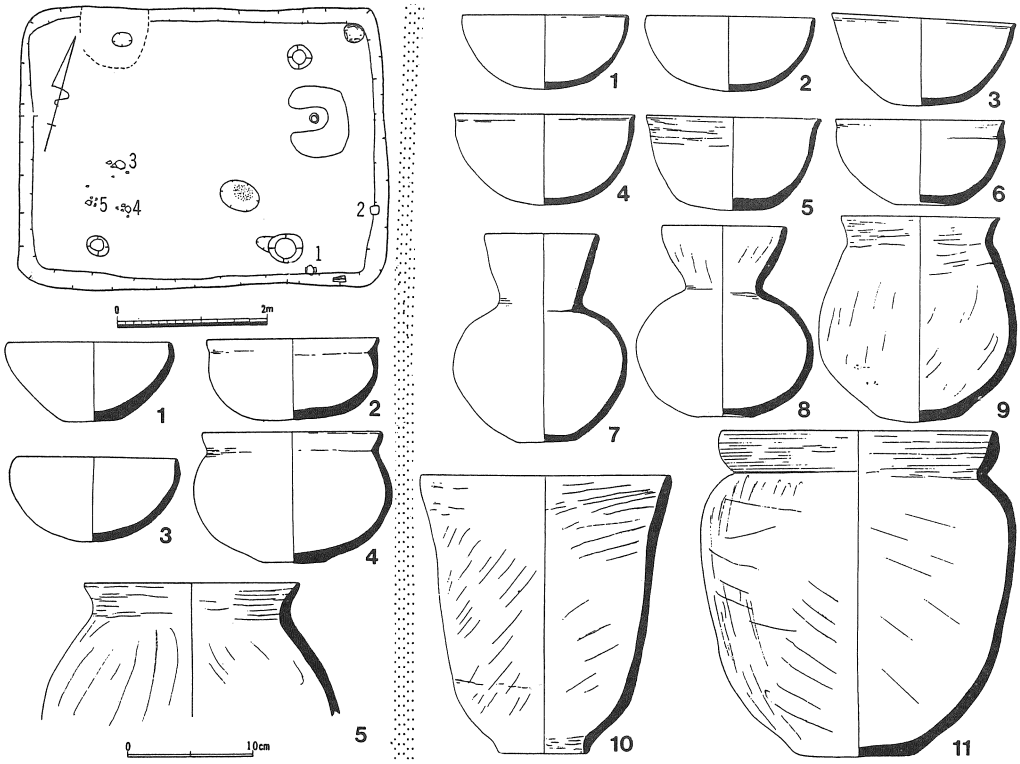
f．秩父地域

該期の遺跡は、確認されていない。

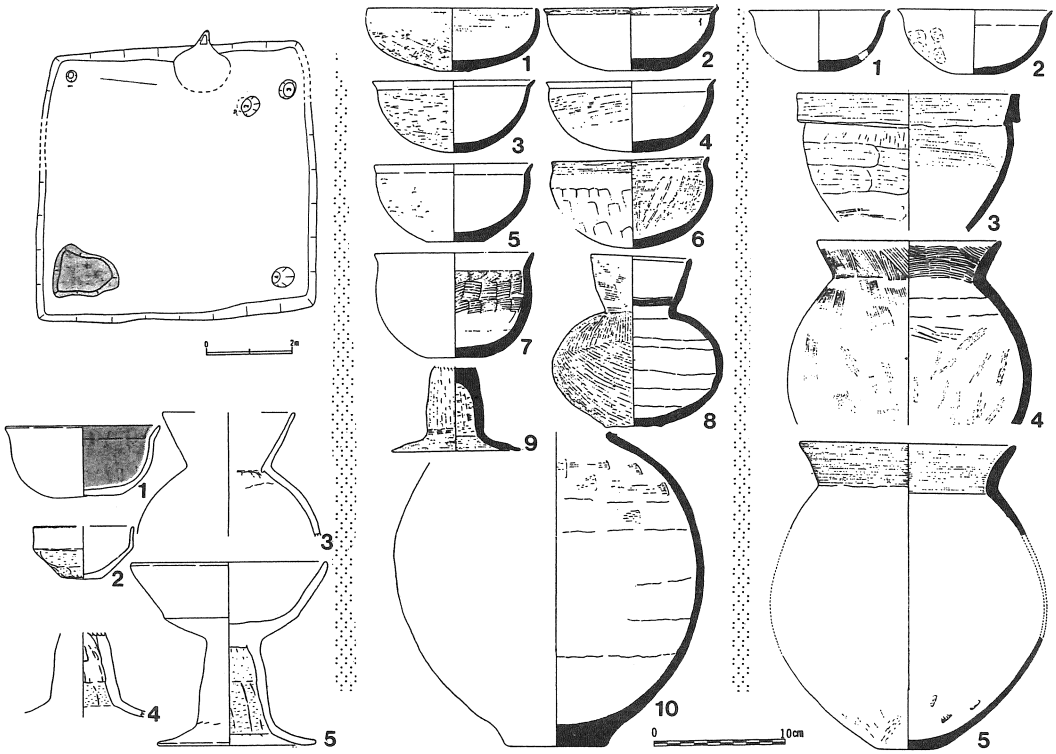
以上、県内の竈・須恵器・大形甑の出現について地域毎に検討してきた。その結果をまとめておこう。まず、Ⅰ期には竈を出現させた地域はないが、児玉地域では大形甑が認められる。Ⅱ期になると、児玉地域・埼玉地域で竈・大形甑が認められる。また、比企地域でも突発的には認められる。Ⅲ期になると比企地域・大宮地域で竈・大形甑が認められる。Ⅳ期になると入間地域で竈・大形甑が認められる。ただ、児玉地域・埼玉地域を除く地域では、Ⅲ・Ⅳ期になっても総ての住居跡にまで竈は普及していない。

２．関東地方

北関東については、坂口　一「東国須恵器の一様相」（坂口1988）の研究成果がある。群馬県については、田口一郎「古式須恵器をめぐる諸問題」(田口1987)と題した発表に依拠したい。坂口の編年もこれに準拠しているものと思われる。南関東については、比田井克仁「南関東五世紀土器考」(比田井1988)がある。これらの成果を参考にして、以下記していきたい。坂口・比田井の編年観は、５世紀を四期区分している。しかし、坂口案は比田井及び拙稿と相違する。坂口編年の『埼玉』を基軸にして、各県の各段階はおおよそ一時期ないし僅かに新しくなるものと考えられる。その点、拙



第11図　前田遺跡第３(左)住居跡・Ａ地点(右)出土土器



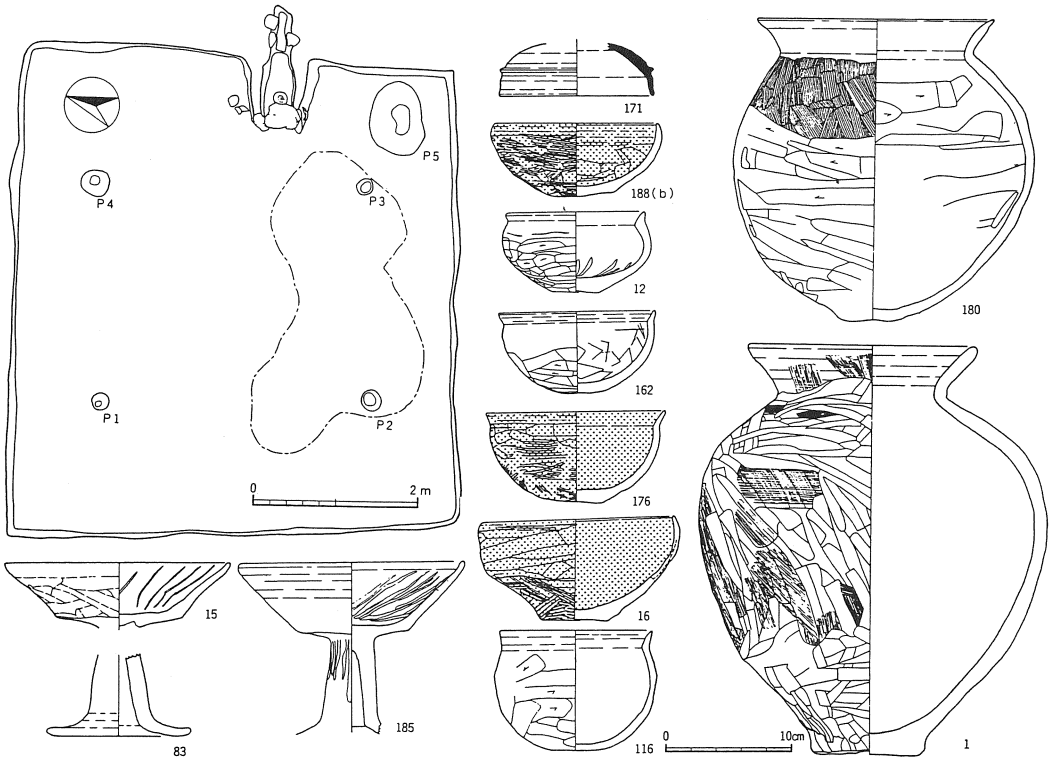
第12図　高井北遺跡第９号住居跡(左)・高井遺跡第１(中)・２(右)号住居跡出土土器

考と比田井の見解は概ね一致している。しかし、これは坂口の見解が誤っているというのではなくて、編年目的と時間幅の認識の相違に起因しているということを断っておきたい。ここでは、本稿の時期区分に修正して記していきたい。

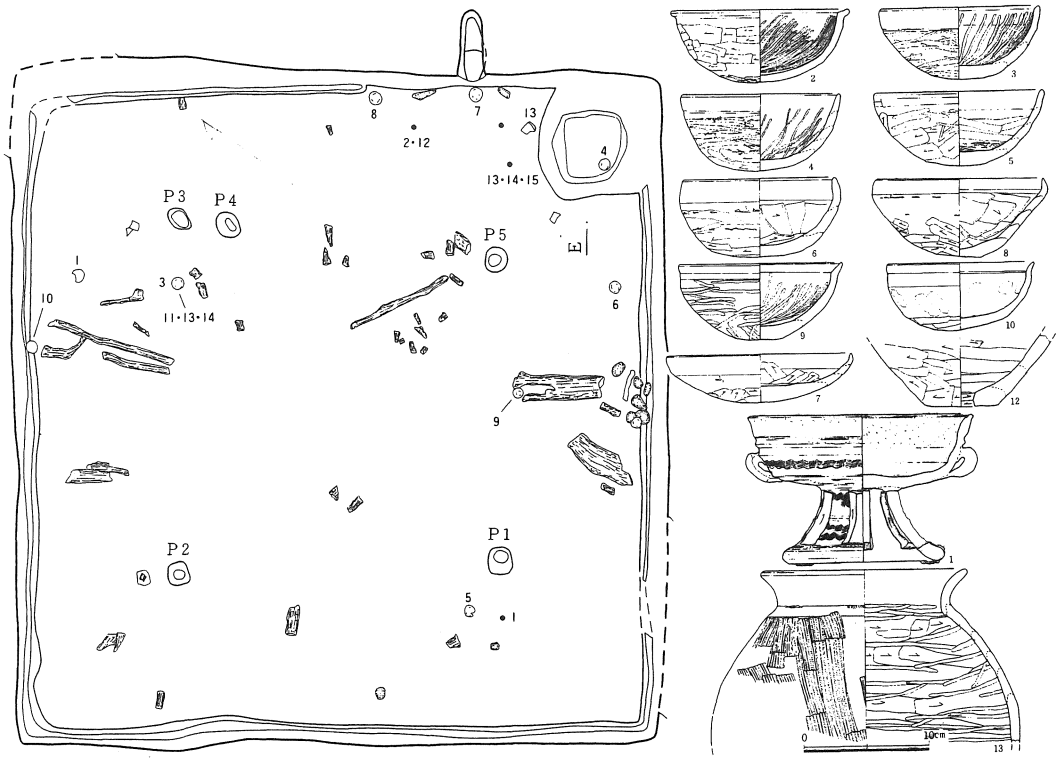
ａ．群馬県（第13・14図）

竈・大形甑は、Ⅱ期の前橋市小神明湯気遺跡第26号住居跡（井野1986）に初現をみる。Ⅲ期になると荒砥北原遺跡第７号住居跡（石坂1986）を代表として群馬町熊野堂遺跡（井川1984）、同三ツ寺Ⅲ遺跡（井川1985）、藤岡市温井遺跡（真下1981）、富岡市内匠遺跡（井上1982）が挙げられ、基本的に総ての住居跡に竈が施設される。これらは茂木由行が「群馬県における鬼高式土器の編年」（茂木1984）で示した『第Ⅰ期』に相当するもので、本稿のⅢ～Ⅳ期に対応する。

内匠遺跡第２号住居跡、温井遺跡第５・25号住居跡の甕形土器、大形甑形土器は長胴化の割合が少ない。椀形土器Ａは器高が高く、また模倣杯Ａが伴出する。これらはⅢ～Ⅳ期に対応する。また、三ツ寺Ⅲ遺跡では『第１・２分類期』を相当するが、時期は若干新しくなる。甕形土器、大形甑形土器はすでに長胴化している。椀形土器Ａは源初杯に変化し、椀形土器Ｂ、模倣杯Ｃも出現している。これらはⅣ期、ないしそれ以降に併行する。確認しておけば竈・大形甑は、Ⅱ期に出現する。須恵器はＴＫ73段階の小形壺が新里村峯岸遺跡第１号古墳、蓋が前橋市小明神湯気遺跡26号住居跡から出土しているが、後者は一段新しくなる可能性がある。なお、ＴＫ23以前の須恵器窯の存在が想定されている（田口1987）。



第13図　小神明湯気遺跡第26号住居跡出土土器



第14図　荒砥北原遺跡第７号住居跡出土土器

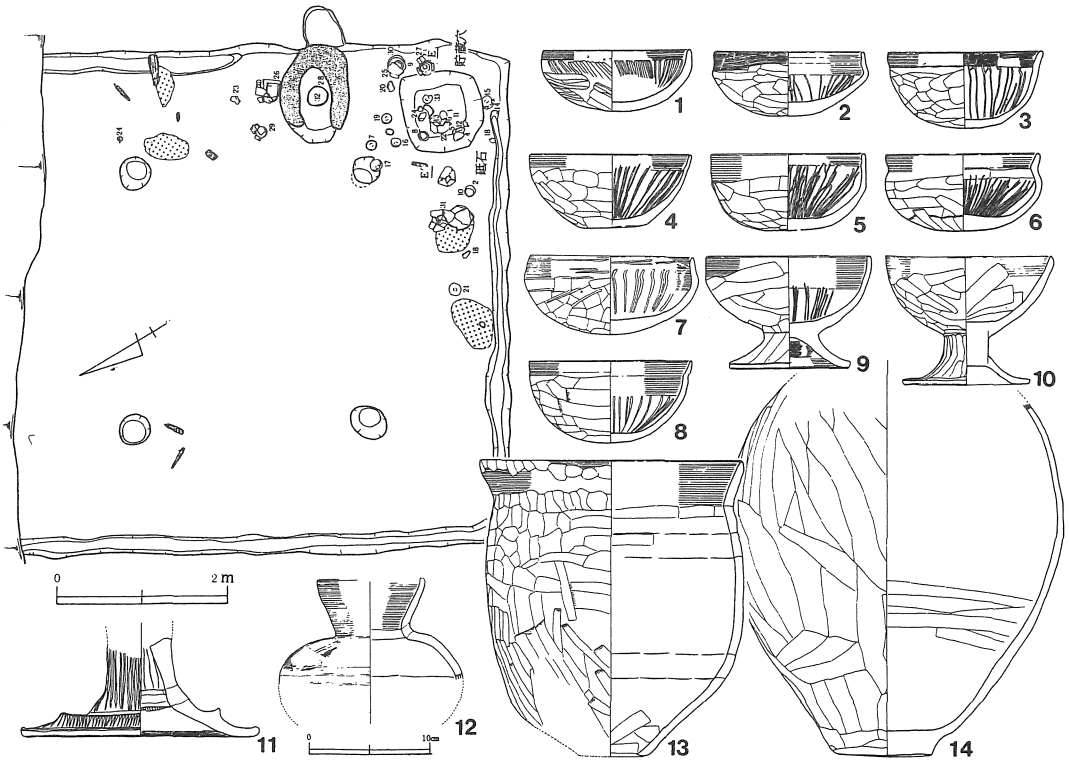
ｂ．栃木県（第15図）

野木町篠山遺跡(山崎1974)、宇都宮市権現山北遺跡(大島1979)、小山市喜沢海道間遺跡(野口1986)、岩舟町赤羽根遺跡(田代1984)がある。篠山遺跡では竈を持つ住居跡が１軒検出されており、時期は、Ⅳ期以降に比定される。権現山北遺跡(大島1979)では和泉期終末の住居跡が８(７)軒検出されているが、該期の住居跡に竈の施設されるものはない。これらの遺物には若干の時期差は認められるが、おおよそ同時存在の住居跡であろう。代表的な５号住居跡、あるいは若干新しくなる７号住居跡であってもⅢ期をさかのぼらない。これに続く鬼高期の住居跡に、第９・16号住居跡の２軒が挙げられる(大島1979)。これらは共に竈を持つものであり、Ⅳ期ないしそれ以降に比定される。赤羽根遺跡でも竈が出現するのはⅢ～Ⅳ期からであるが、須恵器はⅡ期、大形甑はⅣ期から共伴する。

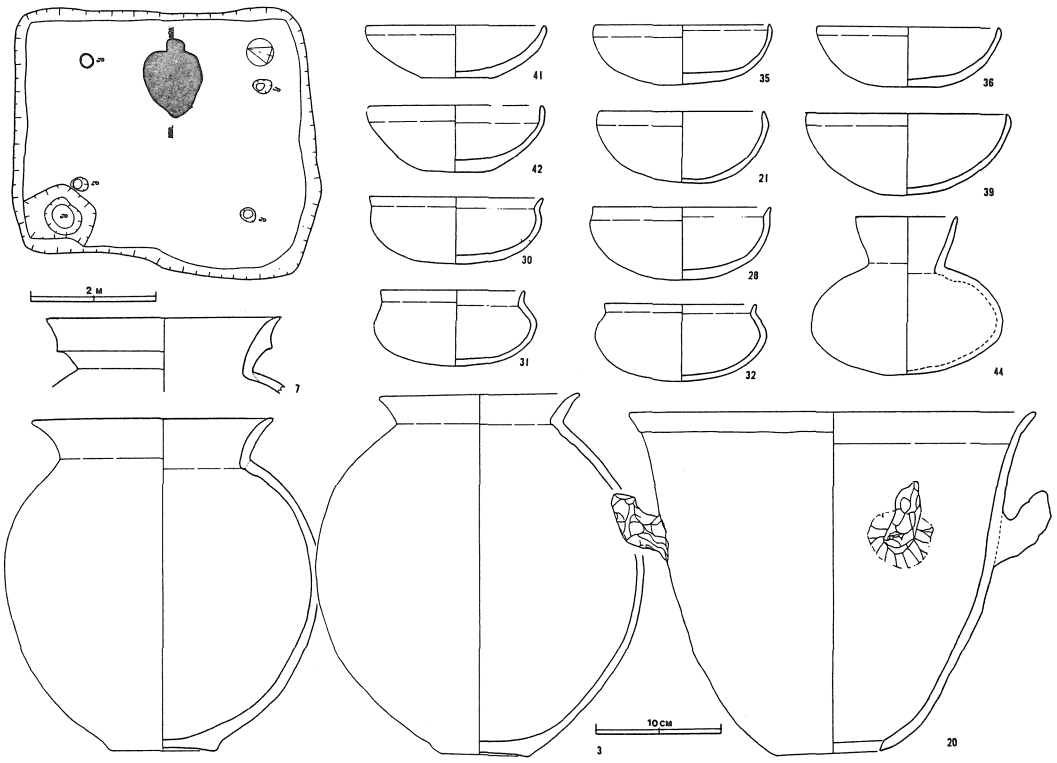
竈の出現は、古くみてもⅢ期の赤羽遺跡第４号住居跡、喜沢海道間遺跡第８号住居跡、県央の権現山北遺跡ではⅣ期を俟たなければならない。須恵器は、TK73段階の杯が権現山遺跡第２号住居跡から出土している。大形甑はⅢ期の権現山北遺跡第７号住居跡で確認され、竈導入時期ないし直前に存在している。

ｃ．茨城県（第16図）

千代田村上稲吉西原Ａ・Ｂ遺跡・同中佐谷Ａ・Ｂ遺跡・同志筑遺跡(山本1980)、石岡市新池台遺跡(和田1983)、東海村小沢野遺跡(茂木1977・84) がある。志筑遺跡第24号住居跡では炉の一端が突



第15図　赤羽根遺跡第４号住居跡出土土器

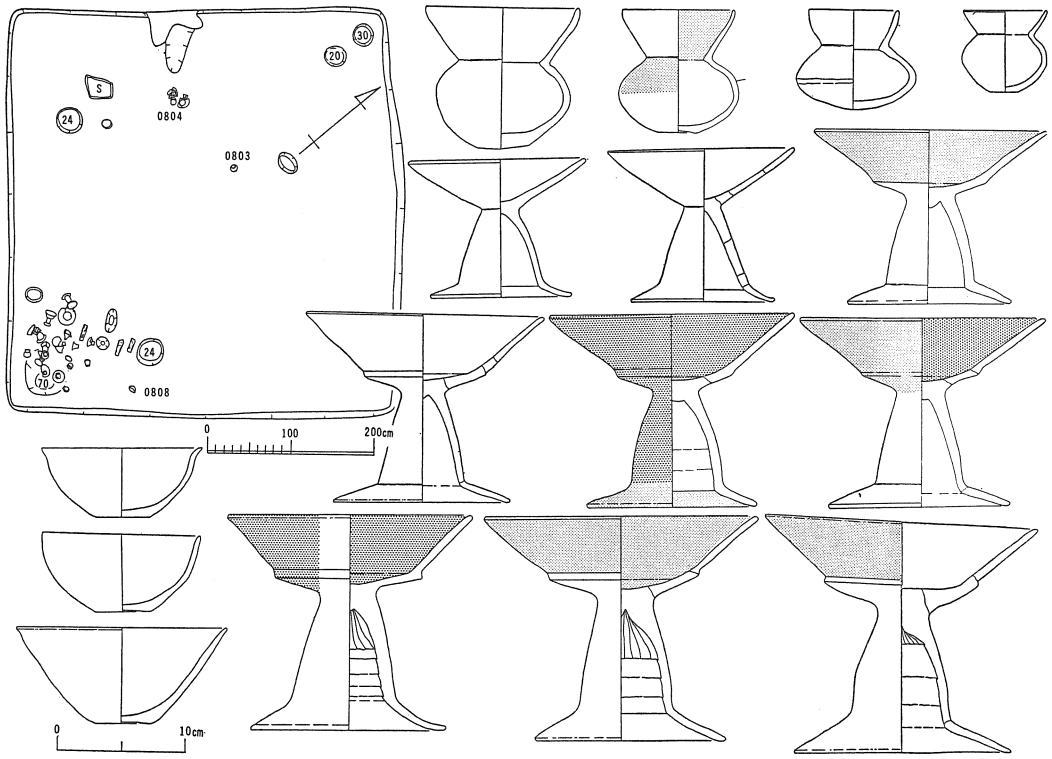


第16図　志筑遺跡第23号住居跡出土土器

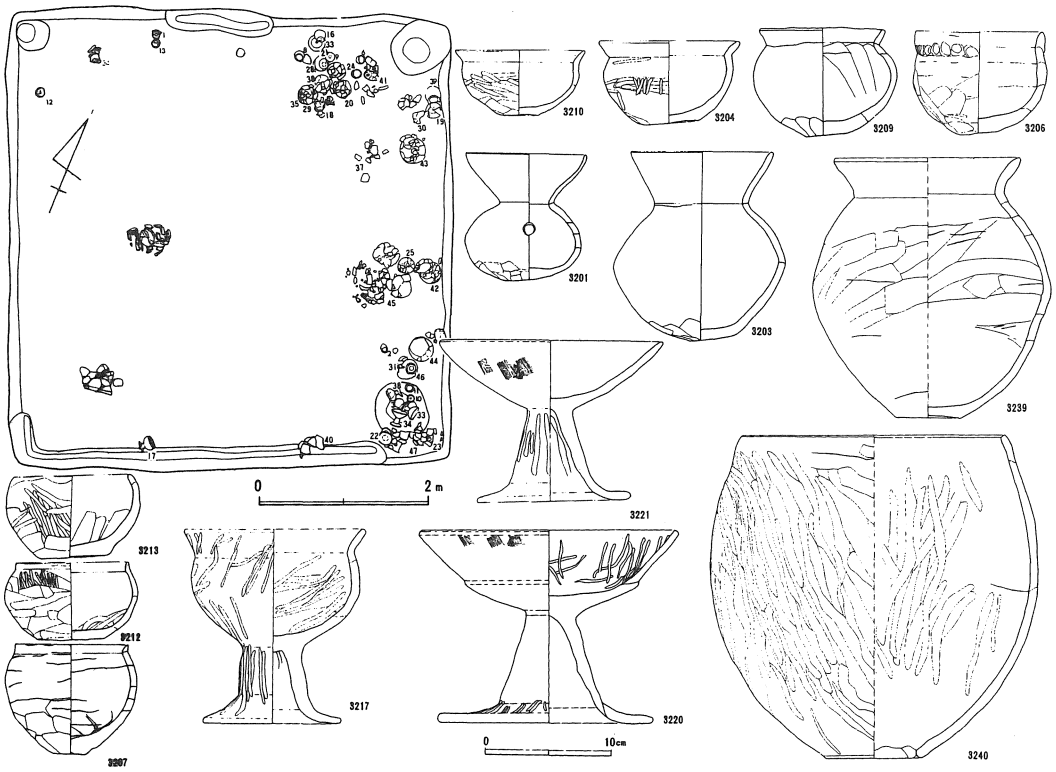
出し、竈への試行傾向が伺える。同期の第26号住居跡では、竈が存在している。時期は、Ⅳ期である。稲敷郡桜川村宮ノ脇遺跡は祭祀遺跡であるが6世紀前半になっても竈を持たない住居跡がある。資料的な制約があり詳細に検討することはできないが、竈・大形甑の出現は、Ⅲ期以降に遅れる可能性が極めて高い。

d．千葉県（第17図）

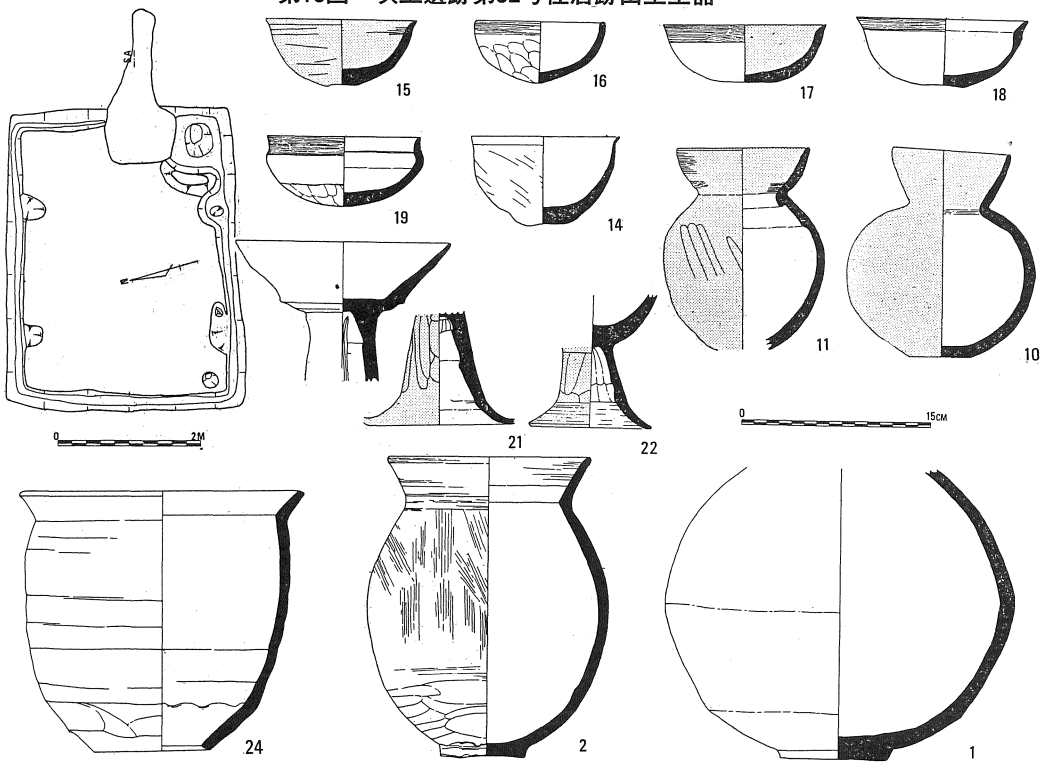
竈の施設は船橋市外原遺跡第8号住居跡（松浦1972）に初現みる。竈出現期の問題を考える前に該期（和泉・鬼高期）の土器編年について、日本考古学研究所の一連の研究がある（村山1981・1982a・b、柿沼1982）ので、ここではこの成果を基にして検討してみたい。これによれば竈の出現をもって和泉期と鬼高期を区分している。まず、和泉期（村山1982b）について紹介しておきたい。該期は三時期に区分される。各時期の特徴を概観すると『和泉第Ⅰ期』は焼成後の穿孔ではあるが甑が存在する。『和泉第Ⅱ期』は焼成前穿孔の甑、及び初源杯・模倣杯Aが出現する。『和泉第Ⅲ期』は大形甑の出現、杯類の出土量が非常に増えてくる。そして、鬼高期（村山1982a）になると竈が施設されるが、『鬼高第Ⅰ期』の土器の様相は和泉期と酷似する。『鬼高第Ⅱ期』には模倣杯C・Dやその他の型の模倣杯も出現し、さらに大形甑の出土量も増える。『和泉第Ⅰ期』から『鬼高第Ⅱ期』までの5段階を本稿の時期に比定すると、『和泉第Ⅰ期』がⅠ～Ⅱ期、『和泉第Ⅱ期』がⅡ～Ⅲ期、『和泉第Ⅲ期・鬼高第Ⅰ期』が第Ⅲ～Ⅳ期、『鬼高第Ⅱ期』は第Ⅴ以降に対応する。なお、村山と比田井の見解は大きく相違する。



第17図　外原遺跡第8号住居跡出土土器



第18図　吹上遺跡第32号住居跡出土土器



第19図　東原遺跡Ｂ区第５号住居跡出土土器

比田井によれば、外原遺跡第８号住居跡は『Ⅱ段階』に比定される。しかし、他の同時期の住居跡において竈の存在は認められない。該期では、基本的に竈が施設されないと言う状況は他の遺跡においても肯定される。竈の施設が自生的でないとすれば、Ⅱ期には既にその存在を知っていたと言うことになる。しかし、普遍的な存在として竈が普及するのは第Ⅲ・Ⅳ期、恐らくⅣ期を待たなければならない。須恵器はTK 208段階のものが、佐倉市大篠塚遺跡(栗本1970)で確認されている。大形甑は、比田井が指摘するように『Ⅳ段階』に出現する。

ｅ．東京都

竈が出現するのは、Ⅳ期の八王子市中田遺跡Ｅ地区２・19住居跡からである。大形甑はⅡ期の日野市吹上遺跡第32号住居跡(清野1979)で出土している。最古の須恵器はTK73段の甕が、板橋区早瀬前遺跡(守屋1987)で確認されている。

ｆ．神奈川県

竈は『Ⅰ・Ⅱ段階』では存在しないが、『Ⅲ・Ⅳ段階』の秦野市根丸島遺跡では未報告のため検討することができない。Ⅳ期の横浜市東原遺跡Ｂ区３・５号住居跡(須山1972)では、竈・大形甑が存在している。須恵器はTK73段階のものが横浜市矢崎山遺跡、TK216段階のものが根丸島遺跡では出土しているという。

関東各都県における竈・大形甑・須恵器の出現時期差についてまとめておきたい。竈はⅡ期に群馬県・埼玉県(千葉県)、Ⅲ期に栃木県、Ⅳ期に茨城県・千葉県・東京都で出現する。千葉県のⅡ期の竈は突発的なものであり、ある程度普遍的な存在となるのはⅣ期になってからである。大形甑はⅠ期の埼玉県、Ⅱ期の群馬県・東京都、Ⅲ期に栃木県、Ⅳ期に茨城県・千葉県でみられる。須恵器については、TK73段階のものは千葉県・茨城県を除く各都県で確認されている。残存・伝世の問題はあるにしろ、TK73段階がⅠ期におおよそ比定されることは間違いない。

３．竈・大形甑・須恵器

ａ．竈

竈の出現ついては、種々論議されている。その経緯については、笹森健一(笹森1978)、横川好富(横川1987)、岩松　保(岩松1987)によって、それぞれまとめられている。竈を大陸から伝来したとする大場磐雄の大陸伝来説(大場1955)、須恵器窯の影響を受けて独自に出現したという大川　清の在地発生説(大川1955)が基幹にあり、共に国際的視点にたった見解である。一方、石野博信は『カマドの発生は、弥生時代後期の類カマドから近畿地方において漸移的に形成された』(石野1975)として在地発生説をとっている。

その後、竈出現の視点は国内の問題として論議されるようになる。しかし、以下の大陸伝来説が直接的なものか、畿内を経由しての間接的な影響なのか論議されることはないが、後者の意図に沿って展開しているようである。特に、東国に出現した竈の経緯が問題にされた。横川好富は、大陸の影響により関東地方の一地域に出現したものが各地に分散していったと考えた(横川1968)。高橋一夫は、竈は熱処理方法の発展によって炉から転化したもので関東地方で多元的に発生したと考えた(高橋1975)が、その後自説を徹回しているようである。また、井上尚明は初期竈を『Ｃ類(知識と

して認識)』、『B類(具体的なモデルを認識)』、『A類(構造を把握)』に分類した。これらは順次展開することから竈は完成された形で伝来したものではないとしたが、やはりその契機に関しては伝来説を踏襲している(井上1986)。いっぽう、藤田至希子は構造物としては、確認できていない古墳時代前期に甕の使用痕跡の復元から間接的に『竈』の存在を想定している(藤田1986)。井上のいう天井部の存在しない『竈(B・C類)』と同様な想定をしている。畿内における古墳時代前期の甕の使用痕跡は、底部から加熱されており、なおかつ、口縁部まで煤けていることから吊り下げる方法(『浮置A方式』)を想定したことがある(中村1987)。しかし、炉の構造の変化も考慮しなければならないかも知れない。私も把手を持つ大形甑が須恵器・韓式土器の影響を受けて出現したものであり、この大形甑と不可分の関係にある竈もまた、大陸の影響であるという大陸伝来説を唱えたことがある(中村1982)。現在、竈の出現は大陸伝来説が定説となりつつあるし、私も賛同するものである。しかし、石野博信の『類カマド』(石野1975)、藤田至希子の『煮沸形態Ⅱ(古墳時代前期)』(藤田1986)、井上尚明の竈『B・C類』(井上1986)の想定から竈の在地発生説的見解を今一度検討し、在地の主体的動態を把握する必要があるのではないだろうか。

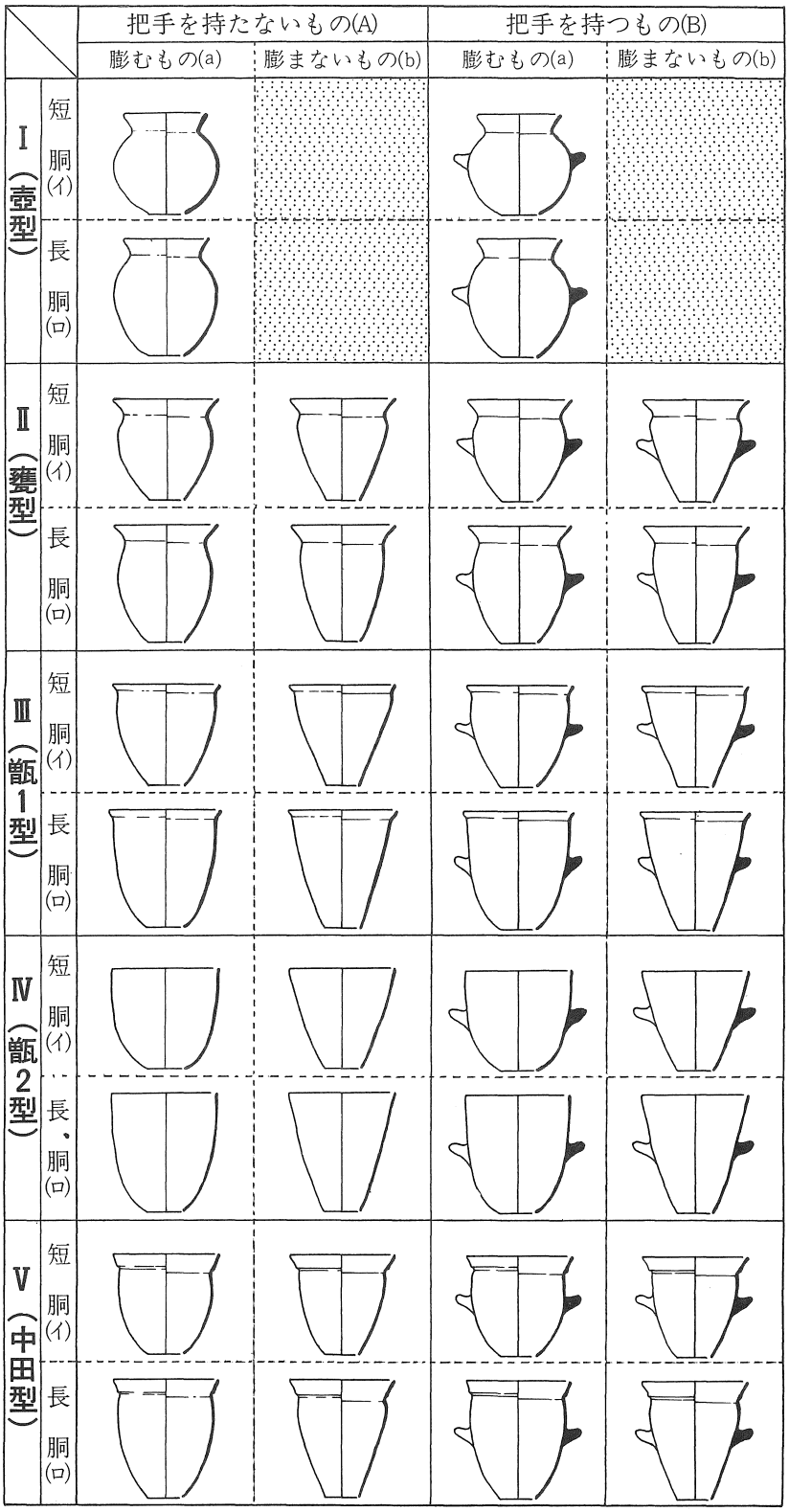
ところで、前節で検討したように関東地方に竈が出現したのは、Ⅱ期の群馬県小神明湯気遺跡・埼玉県諏訪遺跡であるという結論に達した。土器から見るかぎり後者が相対的に新しいが、ほぼ同時期として捉えられる。小神明湯気遺跡第26号住居跡では、竈構造が整っているのに対し、後者の諏訪遺跡第32号住居跡では primitive な形態である。つまり、仮に primitive な竈が群馬県にも存在するとすれば、最古の地位はより不動のものとなる。東日本最大の古墳や多数の豪族居館を有し、畿内に対峙した毛野政権を擁する群馬県に最古の竈が存在することは、竈出現の意味を考える上で極めて示唆的である。結論を急げば、竈は完成されたものとして後の東山道経由で毛野に導入されたと考えたい。そしてその影響を受けて、北武蔵やその他の地方に伝播したものであろう。そのために東国における竈は、大きな地域間で比較した場合 primitive なものがより古いとは言えない可能性がある。なお、千葉県外原遺跡でも該期の竈が見られるが、その後継続して展開していかないので、突発的なものと捉えておきたい。

また、東北地方に目を転じると宮城県岩切鴻ノ巣遺跡(白鳥1974)、福島県佐平林遺跡(大越1980)が竈出現期の遺跡である。前者は遺物と住居跡の関係が不詳であるが、遅くとも6世紀前半には比定されよう。

b. 大形甑(第19・20・21・22・23図)

大形甑は竈との関連が密接であり、両者は不可分の関係にある。それでも、大形甑はモノとして移動が可能であるのに対し、竈の構築は技術を要するために前者が先行して出現する場合が多い。この現象は、埼玉県児玉地方や東京都などでみられるが、さほど重要な事象ではない。ここでは、竈出現の最も早い埼玉県北部の愛宕遺跡でⅠ期の大形甑が検出されていることを確認しておきたい。

大形甑は須恵器・朝鮮半島系土器の模倣形態として普及・発展していった。半島で通有な土器に把手を付ける形態は、大形甑にそのまま継承された。汎日本的な傾向である。これらの形態には、口縁部が外反する『甑1型』と口縁部が直上する『甑2型』がある(第21図)。大形甑は、これらの模倣形態として展開している訳であるが、地域や時期によって形態が異なっている。拙稿『大形甑』(中



第20図　大形甑の型分類

村1982）を基にして、以下述べていきたい。

分類（第20図）

Ⅰ型、口縁部は屈曲して外反し、最大径は球形の胴部にもち、壺型を呈するもの。

Ⅱ型、口縁部は屈曲して外反し、最大径を口縁部にもつか、あるいは胴部とほぼ等しいもの。

Ⅲ型、口縁部は短く、弱く外反し、最大径を口縁部にもつか、あるいは胴部とほぼ等しいもの。

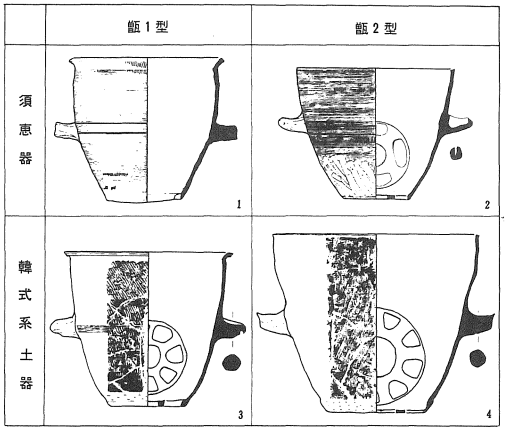
Ⅳ型、口縁部と胴部の区別の無いもの。

Ⅴ型、口縁部が把厚して外面に積み上げ痕をもつか、あるいは更に弱く外反するもの。

各型は把手の有(B)無(A)、胴部の短(イ)・長(ロ)、胴部の膨らむもの(a)・膨らまないもの(b)などの条件によって細別できる。また、孔の形態について小孔単孔、大孔単孔、大孔多孔、小孔多孔に分類できる。なお、韓式系土器の

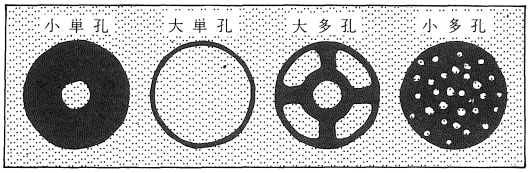
底部は、大孔多孔である。

Ⅰ型は竈の在地発生説が成立すると仮定すれば、大形甑も在来の器種の中から生まれることが予想される。本型は、竈出現期の壺(甕と酷似している)に形態が類似している。「知識」として認識した段階に模倣したものであろう。『壺型』と仮称する。Ⅱ型は、甕の長胴化と歩調を合わせて展開する在地性の強い型である。『甕型』と仮称する。Ⅲ・Ⅳ型のうち、特にⅢBイは『甑1型』、ⅣBイは『甑1型』、ⅣBイは『甑2型』をtypicalに模倣した形態である。Ⅴ型は、弥生時代の小形甑の特徴である口縁部の肥厚という現象を残存させた形態である。



1.陶邑・深田(中村1973) 2.陶邑(中村1973)
3.日下(阿部1980) 4.芝ケ丘(阿部1980)

第21図　須恵器・朝鮮半島系大形甑土器の型



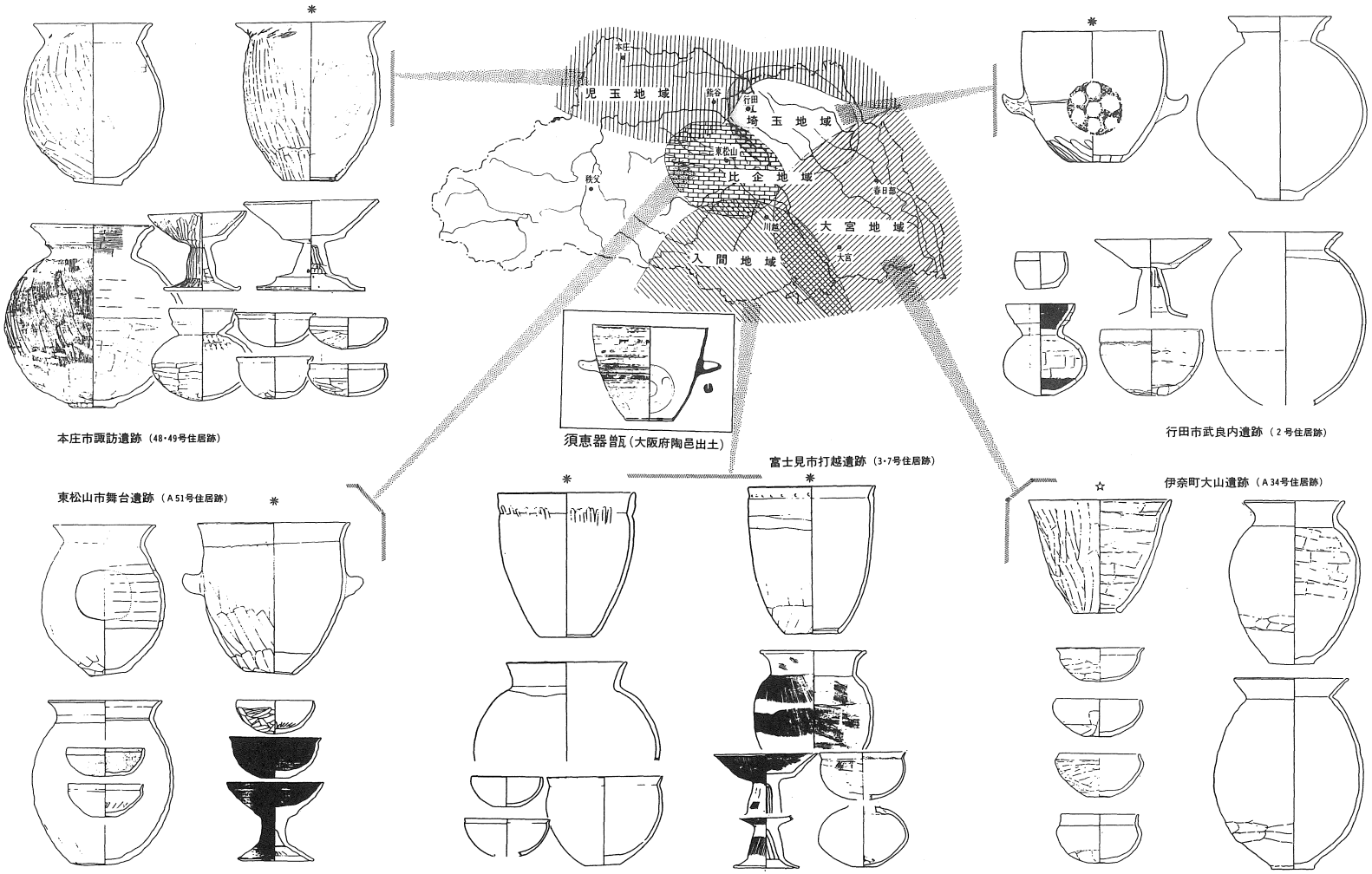
第22図　大形甑の孔

以上の分類を念頭に措き、まず県内の様相を見ていきたい(第23図)。①児玉地域／5世紀代ではⅠA・ⅡA型が多く、把手をもつものや大孔多孔も二例確認されている。6世紀以降では、ⅡAロ型が典型的な型として展開する。②比企地域／5世紀ではⅡ・Ⅲ・Ⅴ型が認められ型が安定していない。特徴的なのは、Ⅲ・Ⅴ型の多くに把手(B)を持つものが多いと言うことである。6世紀以降ではⅡAロが典型となる。③入間地域／5世紀代では、ⅤA型が主流である。④埼玉地域／5世紀代では、ⅣBイ型の『甑2型』を忠実に模倣した資料が特筆される。6世紀以降はⅡAロが典型的な型として展開する。⑤大宮地域／5世紀代ではⅢAロ・ⅣAロがあるが、資料が少ない。6世紀以降ではⅡAロ型となる。⑥秩父地域／5世紀代は不明であるが、6世紀代ではⅡAロの他にⅣB型も多く認められる。以上が埼玉県内の様相である。

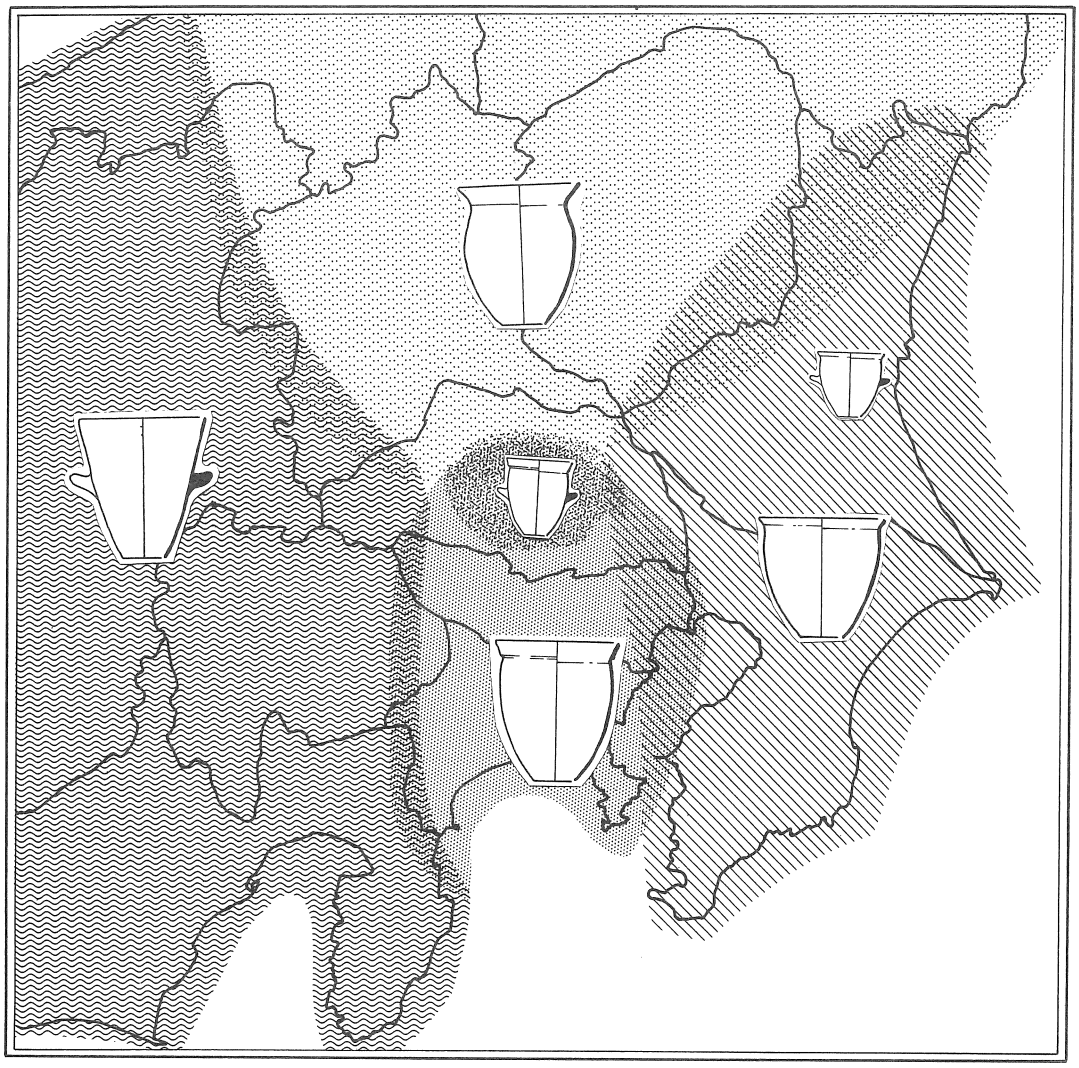
ところで、東日本に大形甑が波及してきた時点で、大形甑は把手付であったが、やがてそれを消失する。群馬県・栃木県・埼玉県北部・東京都・神奈川県では、特にその傾向が高い。いっぽう千葉県・茨城県では、把手付大形甑の散見する頻度が高い。関東地方の大形甑は型によって、三つの分布圏が認められる。これらの大形甑のなかには例外も比較的多くみられるが北関東ではⅡA型、南関東ではⅤA型、東関東ではⅢA型が基本的な型である。そして、北関東と南関東の接する埼玉県比企地方を中心にしてⅤB型が分布する。東北南部では大形甑はⅠ型がみられ、なかにはボッチ状の把手もある。なお、西日本では基本的に把手付の大形甑が分布している。

ところで、大形甑の把手は故地である朝鮮半島では基本的な形態であるが、その用途は恐らく甕に掛けても把手は熱くならないので移動させるための機能を持っているのであろう。把手を持たない南関東のⅤA型大形甑には、編竹で覆ったものが東京都船田遺跡(服部1973)に見られ、使用方法を復元するには興味深い事例である。

大形甑の導入は、(a)米の調理方法を煮る(姫飯)から蒸す(強飯)に替えたと言われる。(b)柿沼幹夫



第23図　埼玉県各地域における大形甑の基本型



第24図　関東地方における大形甑の基本型

は「畑作農業の盛行によって供給された大麦・粟・稗・豆類等が甑形土器の機能を高め、(大形甑を)受容せしめる要因になった」(柿沼1976)とした。また、(c)笹森紀巳子は労働力貢納に伴う携行食としての『糒』生産と捉えている(笹森1982)。大形甑のこれれらの説については、拙稿「器種組成の変遷と時期区分」(中村1984)で検討し、(b)説を補強したことがある。大形甑によって携行・保存食としての糒が生産されたことは予想される。しかし、携行・保存食として糒が生産されたとしても、それは在地の内的要求によって出現した現象であり、これが収奪者の政策として直接的に労働貢納の付加的要素になることは有り得ないのではないだろうか。つまり当初の糒生産は、『貢納』という政治的色彩の強いものではなく、内的要求(各地域における労働力貢納を含めて)によってなされたものと考えたい。笹森によれば『かまどの出現(の背景)は、家父長的世帯共同体が畿内王権の組織下に編成され』(笹森1982)た結果と捉えるが、該期はその試みが為された段階であり、組織化には全く不十分な時期と考えられるからである。大形甑の主要な役割は、半島から新たに将来された作

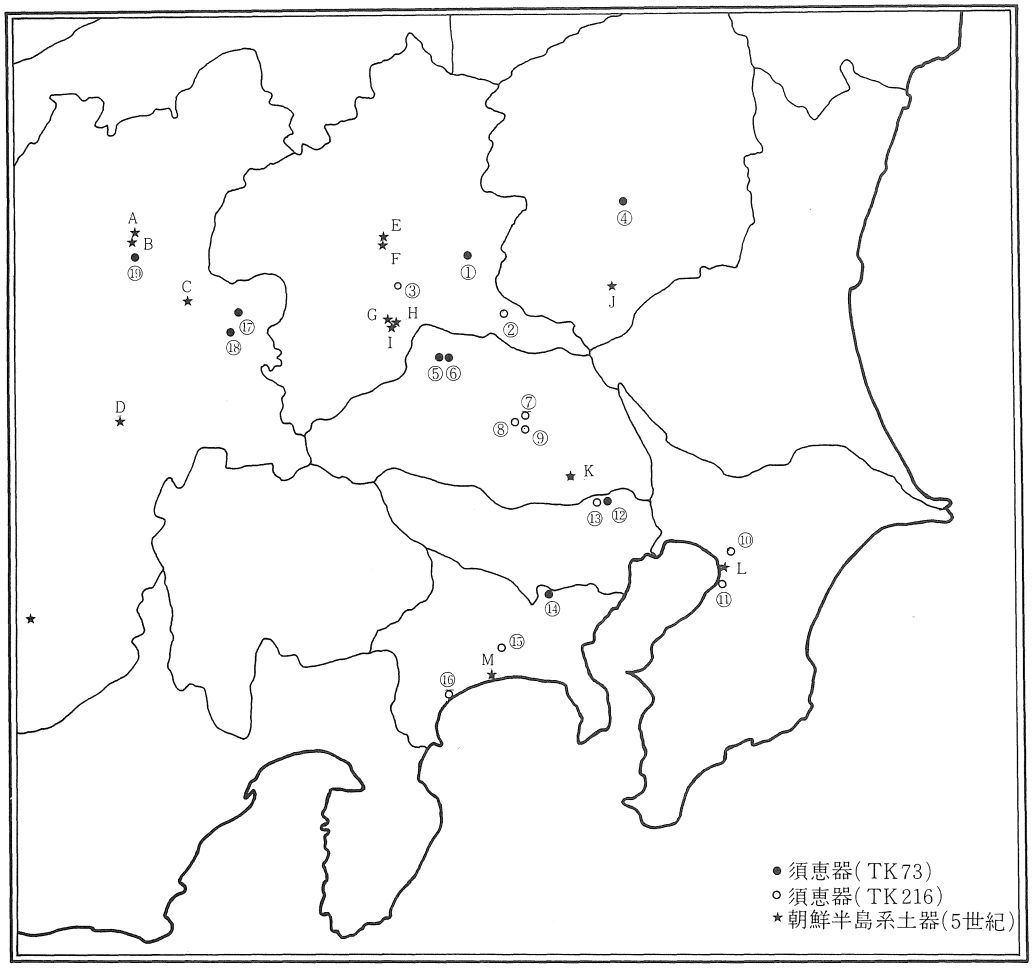
物による畑作の普及・拡大によって『蒸す』という調理方法が浸透した結果ではないだろうか。『蒸す』という行為は、半島の伝統的な調理方法である。大形甑の出土傾向は、個々の竪穴式住居跡単位で検出され、特別の傾向は認められない。大形甑の存在を政治的所産としてではなく、『文化』的所産として捉えておきたい。

炉から竈への移行には、煮沸方法の転換という実用的な意義とそれを受容した政治的な背景の2つの視点からの検討が必要でである。竈は波のように自然に押し寄せてきて、北関東に最初に漂着したのではなく、ある意図によって積極的に導入されたのである。当地方の竈導入以前の煮沸方法は、S字状台付甕として台で支える『浮置A方式』を完成させていた中心地域である。これは畿内を中心として展開した甕を紐で吊り下げる『浮置B方式』に対抗するものであった。台付甕は、受熱部を浮かせて熱効率を高める為に工夫された形態である。しかし、台の存在が炎いし真下から熱を受けることができないという限界も併わせ持っていた。煮沸に対する執拗な要求、熱効率の質的飛躍のための熱意が竈導入の原動力であった。竈導入は、大形甑の導入でもある。

c．須恵器（第25図）

須恵器は大形甑と同様にモノ自身で波及することができるために、出現時期は竈よりも一般的に早い。初期須恵器と同様に朝鮮半島系土器も各地で散見する。併せて検討してみたい。東国における須恵器・朝鮮半島土器出現の意味は、何処にあるだろうか。これらの波及した器種は、大甕・瓻・高杯・杯など比較的豊富である。しかし、機能的には土師器と大差なく、日常雑器として使用されたとは考えられない。大甕は『酒甕』、瓻は『注器』、高杯は『お供え器』として祭祀に関与したものであろう。祭祀に使用する目的で受容されたのである。初期須恵器や朝鮮半島系土器は、古墳よりも集落から出土するものが多いことが指摘されている(酒井1984)が、古墳出土のものも多い。つまり、石製模造品や高杯による伝統的な古墳祭祀の一環として、宝器的性格も加わって須恵器は受容されたものと思われる。笹森健一の論考を私意的に解釈すれば、従来の象徴観念であった無彩土師器(『黄』)と赤彩土師器(『赤』)の二極構造が複雑化し、須恵器の『青』を交えて三極構造になったと捉えた（笹森1978)。横穴式石室出現に象徴される『黄泉の国』の観念の成立と符合するのであろうか。模倣杯の出現は、須恵器に対する観念の昇華・安定を意味する。

ここで関東各地の初期須恵器(TK73・TK216)・朝鮮半島土器(5世紀代)について、その分布を紹介しておこう。該期の須恵器については、『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』(北武蔵古代文化研究会)・『南関東五世紀土器考』(比田井1988)を、朝鮮半島系土器については「東国の朝鮮半島系土器」(酒井1987)の成果を基にして作成したのが第25図である。これによれば、TK73・TK216段階の須恵器は若干の粗密はあるものの、ほぼ関東全域に分布していることがわかる。それでも北関東に若干多い。朝鮮半島系土器は、長野県・群馬県に集中する傾向がある。なかでも長野県では、比較的濃密にTK73段階の須恵器が分布している。例を挙げれば佐久市舞台場遺跡・御代田町前田遺跡・更植市森将軍塚古墳・飯田市ツカノコシ古墳などかある。その他に、酒井清治「東国の朝鮮半島系土器」（酒井1987)も参考にして半島からの渡来品と考えられる資料を挙げれば更植市城の内遺跡・同土口将軍塚古墳・同屋代遺跡・同屋代遺跡・丸子町鳥羽山洞窟遺跡・長野市四ッ屋遺跡・同駒沢新町遺跡・中野市紫岩古墳などかある。もちろん南からの波及もあり、神奈川県・



第25図　東国における初期須恵器と5世紀代の朝鮮半島系土器(酒井1987他参照)

東京都に最古の須恵器をもたらしているし、神奈川県愛宕山下横穴からは朝鮮半島系土器が出土している。なお、TK23以前の須恵器窯の存在は坂本和俊(坂本1981)、酒井清治(酒井1984)や田口一郎(田口1987)によって想定されているが、TK73・TK216段階の須恵器窯は未だ確認されていない。該期の須恵器のうち在地産と目されるもの以外は、東海地方からの搬入品であることが指摘されている(酒井1984)。

ところで、須恵器製作が在地においてなされない場合、これらが搬入された微妙な時間差は存在する可能性がない訳ではない。該期の須恵器については、儀器的な要素から宝器的な性格が強く、伝世の問題を含めて『残存・混入』による共伴遺物の時間差は、有り得るのではないかと考えられる。例を挙げるのは避けるが、共伴関係に疑問を感じる資料も少なくない。共伴関係を直ちに須恵器の年代観に当てはめるには躊躇せざるを得ない。『残存・混入』は、個体の耐用年数によって偶然起こる現象であり、土師器にも当てはまる。これが土器編年を繁雑ないし混乱させる原因になっ

ている。須恵器は、あくまでも参考として捉えるべきである。須恵器に対する過度の信頼は、安易な土器編年の作成につながり、最も資料の豊富な土師器の検討を蔑ろにする危険性をはらんでいる。それでも地域間の併行関係や年代を把握するには、須恵器は有効な遺物である。本稿では、須恵器について時期決定の絶対的な根拠にしていないことは、前述したとおりである。

ま と め

関東地方における竈に象徴される漸新な文化改革の波は、北関東の群馬県・埼玉県北部から浸透し、ここに文化的・政治的 colony が形成された。その経路は、中部高地経由であるが、それは跛行的に波及してきた。長野県における竈の導入は、Ⅲ・Ⅳ期である。毛野への入り口である佐久地方の御代田町前田遺跡でもⅣ期であり、基本的に竈の導入は遅れる。竈の普及という側面からみれば、長野県は毛野への通過点的様相を呈している。東海地方西部から中部高地・北関東との緊密な関係は、弥生時代では畿内とは異なった櫛描紋の分布地域として、古墳時代前期ではＳ字状口縁を持つ台付甕の分布地域としての共通性を有している。これらの確立されたルートを基盤として、竈は波及してきたものと考えられる。そして TK73・TK216段階の須恵器もまた東海地方からの搬入品が多いことが確認されている。また、５世紀の朝鮮半島系土器も東海西部に集中して出土している(酒井1987)。東海地方西部は邪馬台国に唯一屈しない狗奴国に比定されており(田辺1963)、毛野はその狗奴国が新たな国として移り住んだ土地である。あるいは、日本海を経由して、直接中部高地に移入してきたことも検討する必要があるかも知れない。

ところで、東国の竈導入経緯に畿内政権が関与していたかが問題となる。５世紀代の歴史観を前方後円墳の普及や三角縁神獣鏡の分与にみられる事象を、畿内王権によって政治秩序に組み込まれる段階とみれば、竈の普及もその影響によってなされたと結論しなければならないだろう。そして、竈の伝播とその『思想』に「『畿内政権』の介在」(岩松1987)も想定されている。しかし、東国に比較して竈の出現時期も差程変わらず、また古墳時代後期の住居跡における竈導入率が30％前後の大阪府のような地域の指導下に竈の普及がなされたとは考えられない。まして畿内に先行して普及した北九州の竈が、畿内王権の影響によって出現したとも到底考えられない。なお、北九州でも竈に先行して朝鮮半島系土器の大形甑が直接将来されている(柳田1985)。また竈と同様に展開する大形甑についても、『労働力貢納としての糒生産』(笹森1982)も地域政権のためであれば納得できないことはないが、畿内王権による収奪の手段として大形甑を捉えることはできない。つまり毛野王権による竈導入は、畿内王権の影響(指導)を受けて為されたものではなく、直接的な半島ないし西国との交渉によって獲得した可能性があるのではないだろうか。しかし、毛野王権が畿内王権の大きな影響を受けていたことは、布留式系土器が竈導入期に出土する(坂野1988)という事実を待つまでもなく、古墳に顕現している。究極まで完成されたＳ字状口縁をもつ台付甕を放棄し、新たな煮沸方法を模策した結果の竈導入であろう。

東国の出現期の竈は、最も古い群馬県小神明湯気遺跡第26号住居跡で完成された構造をもっている。完成された竈は、知識として認識しているのみでは構築できない。つまり、渡来人が直接移入してきた結果と考えたい。あるいは、既に竈の使用・構築に熟達していた西国人ないし彼の地に在

住の渡来人の移入であろうか。東国における竈導入の経路について、笹森健一は東山道ルートと東海道ルートの二者を想定している(笹森1978)。この二つのルートは共に存在しているものと思われるが、前者に遅れて後者が確立したものと考えておきたい。群馬県を含めて関東各地域の稚拙な竈は、小神明湯気遺跡の所在する前橋市周辺に導入された竈の影響を受けて二次的に出現・波及したものもあろうか。北関東から南関東への竈の波及については、須山幸雄「東原遺跡」(須山1972)でも指摘されている。すなわち、これらの周辺地域では知識として竈の存在を認識し、それから構築したのであろう。そのために primitive な竈が導入期に存在するのである。これは、竈の『自生的出現』と同様な現象を呈する。そして在地における竈の受容は、その社会が一定の発展段階に達した時点で行なわれるのである(高橋1975)。大形甑についても即自的に模倣した埼玉県武良内遺跡例については、渡来人(or 西国人)の存在が予想されるが、その他の大形甑は竈の導入と同様に在地において模倣されたのであろう。

現在、須恵器の生産開始時期は前述したように4世紀末から5世紀初頭に比定されている。そして定型的な竈も、福岡県塚堂遺跡(馬田1985)において5世紀初頭から出現している。東国にこの文化改革の第一波が届いたのは5世紀第1四半期(Ⅰ期)であり、それは埼玉県愛宕遺跡の大形甑や各地から出土する TK73段階の須恵器にも見られた。竈が出現するのは5世紀第2四半期(Ⅱ期)であるが、東国にほぼ満遍無く普及するのは5世紀第4四半期ないし6世紀前半になってからである。竈の導入は一朝一夕にして成された観があるが、我が国に竈が出現してから100年、関東に竈が出現してからも、実に50年以上の歳月を必要として竈は定着したのである。

本稿を草するにあたり、塩野　博・鈴木重信・水沢　裕子・田代　隆・加部二生・吉田　稔・中村香葉らの諸氏に資料の提供や実見の便宜を計って戴いた。また、高橋一夫・笹森健一・鈴木徳雄・利根川章彦の諸氏からは、本稿に限らず常日ごろから辛辣なご助言を賜っている。しかし、学兄の好意に応える内容と成っていないのは、筆者の不徳と致すところである。また、富田和夫氏とは資料の収集や討議など共同作業を行なってきた。本来ならば共著とすべきであるが、氏の御好意によって拙著とさせていただいた。以上の各氏のご協力に対し、心より感謝を申し上げる次第である。

≪引用文献≫

㋐会田　明 1978『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集　富士見市教育委員会
新井　端 1982『塩前遺跡、発掘調査報告書』江南村文化財調査報告書第3集　埼玉県江南村教育委員会
井川　達雄 1984『熊野堂遺跡(1)』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第3集　群馬県教育委員会
井川　達雄 1985『三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集　群馬県教育委員会
石坂　茂 1986『荒砥北原遺跡』群馬県教育委員会
石野　博信 1975「考古学から見た古代日本の住居」『家』社会思想社
井野　修二 1986「湯気遺跡」『小神明遺跡群Ⅳ』前橋市教育委員会
井上　尚明 1986『将監塚・古井戸Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第64集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上　太 1981『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市文化保護協会
今泉　泰之 1974『駒堀』埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集　埼玉県教育委員会

岩松　　保 1987「カマドの有る住居無い住居―京都府南部の場合―」京都府埋蔵文化財論集第１集　京都府埋蔵文化財調査研究センター
大川　　清 1955『落合』早稲田大学考古学研究室報告
大越　忠士 1980「西原遺跡」『母畑Ⅴ』福島県文化財調査報告書第85集　福島県教育委員会
大島　和子 1979『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第５集　宇都宮市教育委員会
大場　磐雄 1955『平出』平出遺跡調査会
奥村精一郎 1984「八幡地区圃場整備事業関係遺跡、昭和58年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会
小沢　国平 1957『本庄市二本松第３住居址発掘調査報告』本庄市教育委員会
㋕柿沼　修平 1982「Ⅴ、房総の鬼高期の諸問題　―まとめにかえて―」『日本考古学研究所集報Ⅳ』日本考古学研究所
柿沼　幹夫 1976「甑形土器に関する一考察　―南関東地方出土例を中心として―」『埼玉考古』第15号　埼玉考古学会
柿沼　幹夫 1978『東谷・前山２号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集　埼玉県教育委員会
柿沼　幹夫 1979『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集　埼玉県教育委員会
金子　真士 1977『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集　埼玉県教育委員会
北武蔵古代文化研究会他 1987『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第８回三県シンポジウム
栗本　佳弘 1970「大篠塚遺跡」『東関道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』東関東自動車道遺跡調査団
小久保　徹 1978『東谷・前山２号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集　埼玉県教育委員会
小久保　徹 1979『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集　埼玉県教育委員会
駒宮　史朗 1976『本郷東・愛宕』埼玉県遺跡発掘調査報告書第７集　埼玉県教育委員会
駒宮　史朗 1987「埼玉県出土の古式須恵器」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第８回三県シンポジウム　千曲川水系古代文化研究所
㋟酒井　清治 1984「関東地方」『日本陶磁の源流』須恵器出現の謎を探る　柏書房
酒井　清治 1987「東国の朝鮮半島系十器」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』埋蔵文化財研究会
坂口　　一 1987「東国須恵器の一様相」関東甲信地方における出現期の須恵器について『考古学雑誌』第74巻第１号　日本考古学会
坂本　和俊 1981「ミカド遺跡出土の須恵器をめぐる問題」『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第２集　埼玉県児玉町教育委員会
坂本　和俊 1987「東国における古式須恵器研究の課題」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第８回三県シンポジウム　千曲川水系古代文化研究所
笹森紀巳子 1982「かまど出現の背景」『古代』第72号　早稲田大学考古学会
笹森　健一 1978「平安時代の諸問題」『川崎遺跡（第３次）・長宮遺跡発掘調査報告書』郷土資料第21集　上福岡市教育委員会
白石太一郎 1985「年代決定論」『日本考古』１
白鳥　良一 1974「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第35集　宮城県教育委員会
須山　幸雄 1972『横浜市緑区東原遺跡発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）　横浜市埋蔵文化財調査委員会
清野　利明 1979「吹上遺跡　第８次調査」日野市遺跡調査会年報Ⅱ　日野市教育委員会
㋠高橋　一夫 1975「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究２』校倉書房
田口　一郎 1987「古式須恵器をめぐる諸問題」群馬県の在地窯産の古式須恵器『第８回三県シンポジウム』

田代　　隆 1984『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告第57集　財団法人栃木県文化振興事業団
田辺　昭三 1968『謎の女王卑弥呼』邪馬台国とその時代　徳間書店
田辺　昭三 1981『須恵器大成』角川書店
谷井　　彪 1974『駒堀』埼玉県遺跡発掘調査報告書第４集　埼玉県教育委員会
田部井　功 1976『弥藤吾新田遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第29集　埼玉県遺跡調査会
都出比呂志 1982「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第４号　日本考古学会
利根川章彦 1982「古墳時代集落構成の一考案　―児玉地方の５～８世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として―」『土曜考古』第５号　土曜考古学研究会
㋭中村　倉司 1979「児玉郡における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第38集　埼玉県遺跡調査会
中村　倉司 1982「大形甑　―埼玉県を中心として―」『土曜考古』第５号　土曜考古学研究会
中村　倉司 1984「器種組成の変遷と時期区分―古代北武蔵の例から―」『土曜考古』第９号 土曜考古学研究会
中村　倉司 1987「弥生時代における甕形土器の煮沸方法と熱効率」『考古学雑誌』第73巻第２号 日本考古学会
西谷　　正 1983「加耶地域と北部九州」九州歴史資料館開館十周年記念『大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館
㋩服部　敬史 1966・67・68『八王子中田遺跡（資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』八王子文化協会
服部　敬史 1973『船田』八王子市船田遺跡調査会
坂野　和信 1988「竈導入期の土器」『紀要』第二号　本庄市立歴史民俗資料館
比田井克彦 1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号　史館同人
富加見泰彦 1979『鳴神地区遺跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ』和歌山県教育委員会
藤田至希子 1986「第６節　古墳時代前期の煮沸形態について　―矢部遺跡を中心に―」『矢部遺跡』奈良県教育委員会
㋮馬田　弘稔 1985『塚堂遺跡Ⅳ』福岡県教育委員会
村山　好文 1981「房総における鬼高期の研究（資料編）」『日本考古学研究所集報』Ⅲ　日本考古学研究所
村山　好文 1982「房総における鬼高武土器編年試案」『日本考古学研究所集報』Ⅳ　日本考古学研究所
村山　好文 1982「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報』Ⅴ　日本考古学研究所
茂木　雅博 1984「Ⅴ茨城県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
茂木　由行 1984「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第９号　群馬県考古学談話会
守屋　幸一 1987「東京都」『第８回三県シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題』千曲川水系古代文化研究所
㋯柳田　康雄 1985『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集　福岡県教育委員会
山崎由美子 1974『篠山遺跡』東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書　栃木県埋蔵文化財報告書第12集　栃木県教育委員会
山本　貴之 1980「第12章　志筑遺跡」『常盤自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団
横川　好富 1963『野田市三ツ堀遺跡』野田市文化財調査報告第一冊　野田市郷土博物館
横川　好富 1968『松伏村前田遺跡』埼玉県松伏村教育委員会
横川　好富 1987「竈の出現とその背景―埼玉県を中心として―」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会編　新人物往来社
吉川　国男 1969『高井遺跡』桶川町文化財報告Ⅲ　桶川町教育委員会
吉川　国男 1976『高井北遺跡』桶川市文化財調査報告書第８集　桶川市教育委員会
㋬和田　雄次 1986『新池台遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第17集　茨城県教育財団

研究紀要　第6号

1989

平成元年3月25日　印　刷

平成元年3月31日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市櫛引町2-499　048-652-2231

印　刷　新日本印刷株式会社